



神の母聖マリア (ルカ 2:16-21)

欠くことのできない方をこの一年証ししていこう

新年明けましておめでとうございます。年賀状を小教区の皆さまにはお出ししていないので、この場を借りてご挨拶申し上げます。本年もよろしくお願い致します。

今年の干支は「寅」です。今年の縄跳びに続き、年末からは「トラ」ンポリンを始めています。毎日続けています。目標は今年一年間向き合い続けることです。向き合うと言え、今年度私たちは、いよいよ耐震補強の準備に取りかかります。初めから無理だと恐れず、工事完了の日を想像しながら、一つずつ目の前の課題に「トラ」イしましょう。

神の母聖マリアに選ばれている朗読箇所は、羊飼いたちが、自分たちの見た光景を人々に知らせる場面です。大切なもの、欠くことのできないものを見たので人々に知らせる。幼子の誕生が羊飼いを引き寄せ、彼らは見ただけで終わらず行動に出ました。

マリアが見たもの、それは「幼子を見いだした羊飼いが、出来事を人々に知らせる人になった」という様子です。羊飼いたちは、神の救いの働きが小さくか弱い姿に宿ったことを理解しました。羊飼いたちもか弱い立場の者たちでした。自分たちと同じ境遇に神が姿を取られたことを見たので、勇気づけられ、人々に知らせるのです。

母マリアは、「これらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」(2・19)とあります。マリアの行動が、私たちのこの一年全体に影響します。羊飼いのように、出来事を自分にとって大切なもの、欠くことのできないものと見る人が増えて欲しい。そして出来事を人々に知らせる人になってほしい。これが、出来事を見たマリアが思い巡らしていたことなのでしょう。

私たちも、今の時代に照らし合わせて思い巡らしましょう。私たちが、幼子イエス様を収める心の部屋を用意し、自分にとって大切な方、欠くことのできない方として受け入れるとき、羊飼いの働きが今の時代にも始まります。出会う人に、イエスは生活に必要な方、欠くことのできない方ですと、伝えに行くのです。

ミサの後、あなたはお友だちと会うかも知れない。大切な人と会う約束をしているかも知れない。会いたくない人とうっかり会うかも知れない。それらの人々は、大切な方として心の中に受け入れた幼子イエスを、告げ知らせる相手なのです。そう思ってこの一年出会う人を思い浮かべると、私たちには自然と語るべき言葉が与えられるのです。語るべき言葉は、ここに集まっている新成人にも必ず与えられます。

昨年末、中田神父は茨城に住む妹夫婦の小学生の息子を連れて、実家の鯛ノ浦に帰りました。甥っ子はまだ洗礼を受けていませんが、私にとって真っ先に、幼子イエスのことを知らせる相手となりました。この世を照らす光が甥っ子にも火を灯し、輝いて欲しい。強く願いました。

主の公現(マタイ 2:1-12)



主の公現 (マタイ 2:1-12)

キリストに接ぎ木されて世界に広がっていく

新年の気分も抜け切れてない中、主の公現の祝日を迎えました。このミサを終えたらゆっくり、と言いたいところですが、今年は帰省した人の黙想会を控えています。ミサを終えて続けて黙想会があるので、きつとぐったり疲れて、夜にお酒を飲んだら寝坊する可能性があります。3日月曜日の朝6時のミサはお休みさせてもらって、あとでゆっくりささげようと思います。

昨日の神の母聖マリアの祭日にも少し話しましたが、フランシスコ教皇様は中村倫明司教様を次の長崎大司教に任命しました。ローマ教会法典によると、大司教は次の後継者を事前に指名して、後継者指名を受けた司教が後を継ぐことになっています。司祭たちの間では、いつ頃中村倫明司教様を後継の大司教に指名するのかなと気を揉んでおりました。

なぜ気を揉むかということ、例えば大分教区は現在司教座が空位になっていますから、教皇フランシスコが中村司教様を大分の教区長に任命する可能性もあったわけです。そうならないためには、明確に後継指名をしておく必要があります。

後継者の指名は本当に大切です。島本要大司教様は現在の高見司教様を補佐司教にいただいた後、後継指名をする前に亡くなってしまいました。ここでも、ローマが違う司教を大司教に任命する可能性もあったわけです。高見大司教様が後継者として中村司教を指名しないので、ローマがしびれを切らしたのでしょうか？この話は勝手な推測なのでここだけにしておいてください。

福音朗読に戻りましょう。占星術の学者たちがエルサレムに来て、ヘロデ王にはっきりと告げます。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」(2・2)

占星術の学者たちは、王であるイエスを拝みに来ました。「礼拝する」ということは、単に挨拶ではありません。自分たちがひれ伏す相手として認めることです。ユダヤ人の王と、理解するだけではなく、立場を明確にして、繋がりたいと伝える態度が「礼拝する」ということです。

私は、イエスの次の言葉を思い出しました。「わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていないければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないければ、実を結ぶことができない。」(ヨハネ 15・4)

飼い葉桶に眠る幼子は、人間としてはまだ何も語ることはできませんが、中田神父には「わたしにつながっていないさい」という言葉を語っておられるのが聞き取れました。神の独り子は、成長して全能の神なのではありません。全知・全能・永遠で慈しみ深い神が、すでに占星術の

学者たちに働きかけ、「わたしにつながっていなさい」と呼びかけてくださったのです。

幼い頃私は、母親がカボチャの茎にスイカの枝を接ぎ木しているのを見ました。私は子供だったので、カボチャに接ぎ木したらスイカの枝にカボチャが実るのではないかと心配しましたが、母親の話では、カボチャの茎は強力に水を吸うので、スイカの成長に良いのだという話でした。

「接ぎ木」ということで、わたしにはこの体験しかないのに例に挙げましたが、私たちが何に接ぎ木されるかは非常に大事な問題です。占星術の学者たちが、わざわざやって来て幼子イエスに接ぎ木されようとしているのに、ヘロデはイエスに繋がることを拒み、命を狙いました。本当に大切な存在と繋がることを受け入れることができなかつたので、消し去ろうとしたのです。

私たちはどうでしょうか。目の前に大切なことがあっても、それを打ち消すために他のことに目を向けて避けていないでしょうか。それは小さなことでは掃除をしたくないためにテレビにかじりついたり、仲直りを面倒に思って外出したりするなどです。

大きなことでは、信仰の大切な務めを避けるために、他のことで時間を費やしたり、自分が必要とされている場所があると無理に言い聞かせて礼拝を遠ざけたりするなどです。こうしたことの積み重ねが、ついにはイエスに接ぎ木されることを拒み、枝は枯れ、もはや集められて火に投げ入れられる運命になってしまいます。

占星術の学者たちは、幼子イエスを礼拝し、それぞれの国に帰っていきました。しかもヘロデには挨拶せず、別の道を通っていきます。彼らはイエスに接ぎ木されたので、もはやヘロデと関わることを必要としなかつたのです。これは、私たちへの教訓でもあります。

私たちは、どなたに接ぎ木されて成長したいでしょうか。どなたから養われたいでしょうか。イエス・キリストに接ぎ木されること以上に、確実な成長の道はありません。生涯、養ってくださるイエス・キリストとの絆を、ミサの中で確かなものとしましょう。

主の洗礼(ルカ 3:15-16,21-22)



主の洗礼 (ルカ 3:15-16,21-22)

家族

9日は、命日が近い中田藤吉神父様始め、亡くなられた田平教会出身聖職者と亡くなられた歴代神父様のためにミサをささげております。ごく最近田川清美神父様が亡くなられたので、合計20名の神父様を追悼することになりました。私たち田平教会家族は、こうした神父様のご指導と、祈りによって支えられています。ミサの中で感謝をささげましょう。

1月4日にはたまたま、たくさんの神父様が田平教会を訪ねてきました。山内清海神父様もおいでになりました。その中で、山内豊神父様からていねいすぎる年始の挨拶を受けて、こちらが恐縮しました。「旧年中は、ひとかたならぬご恩を受けました。今年も命を長らえまして、主任神父様にはまたたいへんお世話になるかと思えます。どうぞ今年もよろしくお願い致します。」私は身の置き場もないほどでした。

福音朗読に入りましょう。イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受ける場面です。もちろん悔い改めが必要だったわけではありません。人が悔い改めて、神に向かって歩き続ける、その先頭に立つために、洗礼を受けられた。そのように考えると良いでしょう。この場面で、私は特に「聖霊の働き」として現れた「鳩の姿」を取り上げたいと思います。

「鳩」が聖書で取り上げられる場面が、旧約聖書の中で一つあります。もしかしたらほかにあるのかも知れませんが、「ああなるほど」と思い当たるのは、ノアの洪水の物語です。洪水の後、ノアが鳩を放つと、「オリーブの葉」をくわえて持ち帰った、そういう場面があります。「鳩は夕方になってノアのもとに帰って来た。見よ、鳩はくちばしにオリーブの葉をくわえていた。ノアは水が地上からひいたことを知った。」(創8・11)

この場面は、タバコの「peace」という銘柄のデザインにもなっているので愛煙家にはよく知られていると思います。ノアの洪水の場面では、二度目に放った鳩が持ち帰ったのは「オリーブの葉」でした。もっと言うと、地上を覆っていた水が引いて、緑の大地が現れたことを匂わせる「しるし」を持ち帰ったのでした。

さて、主の洗礼の場面で現れた鳩は、どのような役割を果たしたのでしょうか。鳩と結びつけられているのは、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」(3・22)という声が、天から聞こえたことでした。

天からの声は、御父の声でしょう。鳩はもちろん聖霊のかたどりで。そこに、洗礼を受けたイエスがおられるのですから、御父がご自分の意志を、御子に伝えているということになります。「心に適う」という言い方は、信頼して、委ねているということではないでしょうか。

ですから、この場面での「鳩」は、かつて洪水が引いたことを匂わせた「オリーブの葉」を届けに来たのではなく、「御父のすべての権限

を御子に委ねる」その働きを担っているのだと思います。オリーブに結びつけて言うならば、「オリーブの葉」はオリーブのごく一部に過ぎませんが、イエスの洗礼で御父がもたらしてくれるものは、「オリーブのすべて」オリーブの実とか、オリーブオイルとか、オリーブの木とか、すべてを含むものだったのです。

オリーブは喜びをもたらすしるしでもあるでしょう。オリーブの葉がそうであるなら、洗礼を受けてくださったイエスは御父からの喜びをすべて届けてくださるはずです。主の洗礼の出来事は、これまで「預言」とか、「しるし」しか与えられていなかった神から来る喜びを、余すところなくもたらす出来事だったわけです。

ところで、洗礼を受けた私たちはどうでしょうか。私たちは、周りの人に対して、どのような存在なのでしょう。か。「オリーブの葉」を届ける存在でしょうか。そうであるなら、僅かではあっても神が届けようとする喜びの担い手になっているわけです。しかしそれで十分でしょうか？

きっと、十分とは言えないと思います。私たちは洗礼を受けたにとどまらず、堅信も、その他の秘跡も受けて、神のもたらす喜びを届けるすばらしい器を頂いているはず。そうであるなら、「オリーブの葉」だけではなく、オリーブの実も、届けることができるのではないのでしょうか。

私たちはすでに、人々に届ける神の恵みを受け取る場所に集まっています。祭壇から、イエスは神の恵み、愛の極みである御聖体を分け与えてくださいます。みことばの食卓からも与えてくださいます。これらをそれぞれの生活で人に届けるのが私たちの働きです。

私たちが喜んで届ける人になるなら、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声を聞くことになるでしょう。今週も私たちは人々の中にあって、神のもたらす恵み、喜びを運ぶ「聖霊に導かれた鳩」となれるよう願いましょう。祭壇から食事を頂く私たちは、神と人とを繋ぐかけがえのない存在なのです。



年間第 2 主日 (ヨハネ 2:1-11)

このぶどう酒がどこから来たのか

降誕節から年間の主日に移りました。3月には四旬節に入るので、それまで、短い「年間の主日前期」と呼ぶことにします。年間の主日前期が終わると、四旬節と復活節です。ですから「年間の主日後期」は、復活節のあとからです。

「聖書と典礼」の表紙をご覧ください。「年間第2主日」となっています。年間第1主日という冊子は無かったはずですが、なぜ年間第2主日から始まったのでしょうか？それは、過ぎた1週間が、年間第1週だからです。

教会の暦、「典礼暦」はガチガチに凝り固まった暦ではありません。例えば日本の祝日も、移動したり振り替えたりすることがあります。来年のことを一つだけ取り上げておきましょう。来年の神の母聖マリア1月1日は日曜日です。御公現の祭日は1月8日の日曜日です。

では主の洗礼の祝日は？このような暦の年は、主の洗礼は御公現の翌日、月曜日に祝われます。ご紹介したとおり、典礼暦はまるで生き物のように、やって来る一年にダイナミックに適応して祝われるのです。私は司祭として過ごす中で典礼暦のことをこう考えました。「典礼暦は暗記するものではなく、生きるものなのだ」と。

福音朗読に入りましょう。「カナでの婚礼」が朗読されました。水をぶどう酒に変える奇跡が行われました。私は、ぶどう酒を運んだ召使いについて「このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかった」(2・9)この点について考えてみたいと思います。

召使いが水がめからくんで宴会の世話役に運んだのですから、運んだ物は何の変哲も無い水だったはずですが、しかしそれがぶどう酒に変わりました。しかも、最上のぶどう酒に変わったのです。この奇跡に何が関係しているのでしょうか。

何か、イエスが水に触れたとか、言葉を唱えたとか、そういう書き込みは全くありません。それでも、イエスが何らかの形で関わったから、水がぶどう酒に変わったはずですが、指一本でも動かしたとか、何かしぐさがあったのでしょうか？残念ながらそれはありませんね。

ではイエスはどのように関わったのでしょうか？大切なことを見落としていたかも知れません。イエスがこの婚礼に出席しておられることです。イエスがその場におられるという事実です。この事実こそが、水をぶどう酒に変えるのです。

イエスの奇跡にははるかに及びませんが、私たちは生活の中で似たような経験をしています。特別な料理でもないのに、料理をおいしくいただいた経験はないのでしょうか？それは、料理は特別でなかったかもしれないけれど、一緒に食べた人との時間が特別だったので、おいしくいただけただけなのではないのでしょうか？しばしば食事は、誰と一緒にいてくれ

たかで、違ってくるものです。

カナでの出来事も、イエスが婚礼の席にいたことで水がぶどう酒に変わったのです。実際にぶどう酒に変わったのでしょう。仮に水のままであったとしても（実際にはあり得ないことですが）、その水は今まで飲んだことのない、おいしい水に変わっていたのです。

「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。」（2・11）イエスがその場におられるだけで、水はぶどう酒に変わります。ただの水、何の変哲もないものが、価値あるものになるのです。

これは、私たちにとっても「しるし」となります。私たちの中にイエスがおられ、イエスと共にいることを信じるなら、私たちの中で奇跡が起こりうる、ということです。いつもと変わらないもてなし、毎日の小さな犠牲、もっと言うと意味の見いだせないことさえ、価値あるものになるのです。イエスがそれらを変えてくださるのです。

先週は主の洗礼の祝日でした。イエスが洗礼をお受けになってから、それまでの悔い改めの洗礼に代わり、「聖霊による洗礼」に代わりました。カナの婚礼では、水がぶどう酒に変わりました。出エジプトの出来事を思い起こす食事だった過越の食事は、死から復活の栄光へと過ぎ越す食事に代わりました。イエスの十字架上の奉献によって、死は滅びではなく、新たな命への門となったのです。

「このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかった」（2・9）私たちは今日、喜びをもたらす「ぶどう酒」がどこから来たのか、知る者となりました。私たちは喜びの源が、イエスが私たちと生活を共にしてくださることにあると知りました。

しかし物語の中で、世話役はぶどう酒がどこから来たのか知りませんでした。今も、コロナ禍にあっても喜びが与えられると知らずに生きている人がいます。共にいて、喜びを与えてくれるイエスを知らない人がいます。私たちはその人たちに、ぶどう酒を運ぶのです。

イエスがその場にいてくださること。イエスが共にいてくださると信じること。これが奇跡を起こす力です。もっと、イエスがそばにいてくださることを信じる信仰を育てましょう。私たちに奇跡は起こせませんが、共にいてくださるイエスは、必要なときにためらうことなく奇跡を起こす方なのです。私たちはイエスというぶどう酒を運ぶ人なのです。



神のことばの主日 (ルカ 1:1-4;4:14-21)

イエスは今も、私たちの心の目を開いてくださる

残念ながら、田平教会もミサの中止を決断しました。一定の時間、何十人も集まる状態を今の感染状況で続けることはリスクが高いと判断したからです。それで説教は手短に、そしてカメラの向こうにいる皆さんを意識して届けようと思います。ちなみに先週からミサが中止になった教会に助けられてか、先週の YouTube 動画視聴回数が激増しました。

教皇フランシスコは自発教令の形式による使徒的書簡『アペルイット・イリス (Aperuit illis)』を、2019年9月30日に公布して、年間第三主日を「神のことばの主日」と名付け、「神のことばを祝い、学び、広めることにささげる」ことを宣言されました。以前にも聖ヨハネ・パウロ二世教皇が復活節第二主日を「神のいつくしみの主日」と決めました。教皇様の意向をよく汲んで、この一週間を過ごしたいと思います。

『アペルイット・イリス (Aperuit illis)』はラテン語でして、ルカ 24章 45節”Tunc aperuit illis sensum, ut intellegent Scripturas.”(イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開い〔た〕)から引用されています。歴代教皇の文書はラテン語で発表されたものが公式文書です。そして公文書のタイトルはその文書の冒頭の単語二つがそのままタイトルになります。最近の回勅「兄弟の皆さん」もそうです。

福音朗読は、イエスがナザレの会堂でイザヤ書をお読みになる場面です。イザヤは、将来次のような日がやってくると預言しました。「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。」(4・18)旧約の預言が、実現する日が来たことを、イエスははっきりと宣言しました。

「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」(4・21)。イザヤが種を蒔き、蒔かれた種がイエスによって実を結びました。神のことばは、イエスによって完成するのです。イエスの登場によって、神のことばを完全に祝い、学び、広めることができるのです。

田平教会は、今年度聖書愛読の書巻として「ローマの信徒への手紙」を読み続けています。もしかしたらこのミサ中止によって読み終えることができないかも知れません。可能でしたら、ご自宅で続きを読んでください。神のことばは共にいるイエスのおかげで、家庭でも祝われ、学び、広めることができるようになったのです。聖霊の照らしによって、旧約の人々とは違って、十分に照らしをいただけるようになったのです。

私たちは今日からミサが中止になりました。けれども悪いことばかりではありません。この逆境を「神のことばの主日」をより深く考えるきっかけになったのだと考えましょう。イエスは今も、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と仰って、私たちの心の目を開いてくださいます。



年間第 4 主日 (ルカ 4:21-30)

医者よ、自分自身を治せ

「この人はヨセフの子ではないか。」会堂に集まった人々の驚き怪しむ声です。都エルサレムの、高貴な家の子、もしそうであったなら人々は納得したのでしょうか。「ヨセフの子」ということばの響きは、決してよい響きではありませんでした。

「どこそこの家の子」と呼ばれているとき、それはおそらく「近所の家の、取り立てて珍しくもない子」ということでしょう。会堂に集まった人々は、どこにでもいる家の者がイザヤの預言したことばを実現する者とはとても思えなかったのです。

「どこにでもいる・ある」と聞くと、次の聖書の言葉を思い出します。「聖書にこう書いてあるのを、まだ読んだことがないのか。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。これは、主がなさったことで、わたしたちの目には不思議に見える。』」(マタイ 21・42)

捨てられて踏みつけられるような石が大切な基礎の石になるのは信じがたいし、大工にとっては不都合です。イエスは人々から不都合な存在とみなされ、山の崖から突き落とされそうになるのです。

先週私は夢を見ました。最近よく違う場所で暮らしている夢を見るのですが、そういう夢の一つでした。私は福岡の大神学院に今の年齢のまま再度入学して授業を受けていました。最初の印象は「何で俺がまた勉強し直さんといけんとや？」と腹を立てていたのです。

教授陣は 35 年前のままでしたが、いざ授業を受けてみると、35 年前の内容から研究はアップデートしていきまして、新鮮な驚きをもって学ぶことができました。いったんは「こんな生活は受け入れられない」と憤慨したのですが、偏見を捨てた時、結果は違って見えたのです。

会堂に集まった人々もイエスを「その辺の人」と思っていたので憤慨したのですが、「すぐ隣の人が、もしかしたら預言を実現する人かも知れない」偏見を捨ててそう思えたなら、結果は違って見えたことでしょう。今週の朗読は先週の続きですが、神のことばの完全な答えであるイエスを受け入れるためには、前提なしに心を開く必要があります。

今週持ち帰って欲しい呼びかけは「医者よ、自分自身を治せ」ということです。自分自身に謙虚に向き合わなければ、心を開いてイエスのみことばに耳を傾けることはできません。例えば人柄を見るのに「あの人はこういう性格なのだ。それ以外の可能性はない」と決めてしまいがちです。その人の人柄を固定しているのは私の偏見かも知れない。私は、そんな私自身を治療する必要があります。

神のことばが私の心に豊かに宿るために、イエスの一つひとつのことばに全身全霊を傾けましょう。「ここには得るものは無い」と捨てた石を、私より遅れて洗礼を受けたあの人この人が拾い上げて豊かになるかも知れません。憤慨した人々の間を通り抜けて立ち去られたイエスを、「さようなら」と見送るのではなく「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます」(ヨハネ 6・68) と言えますように。



年間第 5 主日 (ルカ 5:1-11)

人間の知恵と努力の先で神のことばは働く

今週は「漁師を弟子にする」という朗読箇所が選ばれました。本日 2月6日ですが、前日の5日は日本 26 聖人殉教者の祝日でした。少し、26 聖人についても触れておきたいと思います。

皆さんは NHK のニュース 845 をご覧になっているでしょうか？ 平日、夜 8 時 45 分から 15 分間、ローカルニュースを流しています。その最初の 3 秒か 5 秒で流れる映像お気づきですか？ NHK 長崎から大浦天主堂をアップで映して、そこからぐっとカメラを引いて長崎の夜景に移行しています。私はあの数秒で、「あ！大浦天主堂から西坂の丘があの映像のように見えていたに違いない！」といつも思うのです。

もちろん殉教の出来事をプチジャン神父様は見えていませんが、日々殉教者に思いを馳せるために、西坂の丘に聖堂正面を向けたと言われています。私たちの田平教会聖堂も 26 聖人に献げられた教会です。聖堂正面に立つ時、一度でいいから、26 聖人に思いを馳せていただきたいです。

福音朗読に戻りましょう。イエスが漁師シモンに「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなささい」(5・4)と言われたのはもう日も高く上がった時間でした。湖ですから満潮とか干潮とかは起こりません。漁に関係するのは日照です。シモンは「先生、わたしたちは、夜通し苦勞しましたが、何もとれませんでした」(5・5)と、丁寧に申し出を辞退しようとしたのです。「先生」に恥をかかせるわけにはいかないからです。

それでもシモンはイエスに従います。「お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」(同上)。まるで、ミサが中止になった「神のことばの主日」からの連続講話のようです。「お言葉」が、常識では考えられない奇跡を起こしたのです。イエスは「漁をなささい」と言われただけで、作業に指一本貸してもいないのです。むしろそれが幸いでした。

私も六年間、平戸瀬戸にボートで通いました。「通い詰めた」わけではありませんが、にわか漁師の経験で、大潮の時は大いに期待して漁港を出るわけです。しかし思うような釣果にありつけませんでした。意外に思われるかも知れませんが、平戸瀬戸では小潮の時に、大物を掛けたような気がします。イエスは人間の予想に合わせて力を貸してくれるのではないのだとつくづく思い知らされました。

人間の知恵を尽くし、力を尽くして徒勞に終わった直後にイエスから何かを願われたら、私は何と答えるのでしょうか？「さんざん力を尽くしたのです。これ以上何を要求されるのですか？」と不満を漏らすのでしょうか。シモンは私たちに最高の模範を残してくれました。「お言葉ですから、網を降ろしてみましよう。」

じつは田平教会に縁のある聖職者も、同じことばをモットーにして司祭になり、司教になり、今は枢機卿として日本の教会と世界の教会のために身を捧げています。私よりも漁師であった枢機卿様が、「お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」とイエスに全幅の信頼を寄せて神の民を牧しています。見倣わない理由など、どこにもありませんね。

神のことばの働きは、人間の知恵と努力のその向こうで働いてくださいます。「これ以上は私たちには出来ない」そう思ったときが、イエスの出番です。私たちもイエスに全幅の信頼を寄せることにしましょう。



年間第 6 主日 (ルカ 6:17,20-26)

いつでも「最後の授業」ができる人は幸い

2月13日になりました。今日もミサは中止しているのでしょうか？田平教会がコロナ禍の中で長崎教区に誇れることを一つ紹介します。今回も主日の説教と「聖書と典礼」が配布されました。これは他の教会では行われていないことです。

ただ第5波の時に平戸地区司祭団で田平教会の取り組みを威張って話したので、真似をしている教会があるかも知れません。それでも最初に取り組んだという自負は今もあります。YouTubeに関しては、平戸の神父様が黒島にいる間にちょっと先を越されました。

皆さんは「最後の授業」という活動をご存知でしょうか。「定年を迎えた大学教授が、お別れの日におこなった授業」ではありません。現役バリバリの教授が、「もし余命数日の宣告が下されたら？」というような設定で、すべてを賭けておこなう授業のことです。

先週、日本26聖人の殉教に触れましたが今週ももう少し触れさせてください。「日本26聖人殉教祭」は言わば「西坂の殉教者たちを思い起こし、物語るためのミサ」です。しかし単に425年前を振り返るだけでなく、出来事を今どうやって生きてらよいか考える必要があります。

26人の殉教者は、決してこの世を捨てて、この世に背を向けて生きていたのではないということです。時代はキリシタンにとって完全な逆風だけれども、正面から逆風に立ち向かって生き続けた人たちです。誠実に日々を生きて、生き方を曲げることなく貫いたのでした。

私は、26人の京都から長崎への連行と西坂での殉教は、彼らが日頃から用意していた「最後の授業」だったのだと思っています。「どうせもう死ぬから、これだけは言っておこう」という気持ちで立てた証ではなくて、命に満ち満ちた、花が満開に咲いた状態で、すべてを賭けておこなった授業だったと思っています。

彼らは今週の福音朗読にあるようにすべてを取り上げられて貧しい身なりで飢えに苦しんでいました。最後に全員聖体拝領をしたいと願ったけれども半数しか認められず、心は泣いていました。人々に憎まれ、のけ者にされ、ののしられ、汚名を着せられて西坂にたどり着きました。けれども彼らは、与えるものを豊かに持っていました。パウロ三木の十字架の上での説教がそれを証明しています。26人はキリストの弟子となったその時から、すでに「最後の授業」の準備ができていたのです。

私たちはどうでしょうか。何も頼るものが無くなったとき、神にすべてを委ねて、「私には失うものはありません」と、「最後の授業」ができるのでしょうか？私にとっての「一世一代の授業」は、今日やってくるかもしれませんが、三年後かもしれません。

神さまをどのように信じているかを、いつでも自分の言葉で話せるように準備を整えておきましょう。私にとっての一世一代の信仰の証し、最後の授業の準備を、コロナ禍の今こそ整えておきましょう。「神しか頼るものはありませんという最後の授業ができる人は、幸いである。」



年間第 7 主日 (ルカ 6:27-38)

神様の恵みは、いつもすぐに働く

今週の説教は、初聖体を迎える子供たちを意識して 2019 年説教を今年の説教に当てています。この原稿を使って、初聖体を迎えるこどもたちの保護者は、御聖体について教えてあげてください。

御聖体は、見た目は小さなパンですが、このパンの中にイエス様がおられます。イエス様は洗礼を受けた皆さんの心の奥深くに入るために、小さなパンの中におられるのです。お化粧道具もそうですが、粒が大きなものは奥深くに入っていきますが、小さなものは奥深くまで入っていくのです。イエス様は、皆さんの心の奥深くまで入っていくために、小さなパンの形に留まっておられるのです。

小さな姿になったイエス様は、私たちのどの場所まで来てくださるのでしょうか。御聖体を、皆さんが「アーメン」と言っていたかと、あっという間に溶けてしまいます。他の食べ物だったら、よく噛んで食べてもしばらく形が残っているでしょう。けれども御聖体は、きつとすぐに、形が無くなってしまいます。見えなくなって、私たちの隅々にまで届いていきます。

隅々と言いましたが、どこまで届くのでしょうか。中田神父様はこう思います。御聖体のイエス様は、すぐに形が見えなくなるけれども、それは、すぐにみんなのそば近くにいるために、形をなくしてしまうのです。普通の食べ物は、エネルギーになるまで時間がかかります。イエス様はわたしたちを恵みでいっぱいにするために、すぐに形がなくなり、見えなくなって私たちの力になってくださるのです。御聖体をいただいた時からすぐに、イエス様は私たちの中で働き始めるのです。

私たちは健康な時だけではなく、病気の時もあります。病気の人は薬をもらいますが、薬が効き始めるのにも時間がかかります。飲んですぐ効く薬はないのです。けれども御聖体は、拝領してすぐに、あなたの中で働き始めるのです。病気の時も健康の時も、罪を犯している時でも、イエス様の恵みは、受けたらすぐに、働き始めるのです。

毎日、すぐに働くお恵みが必要です。一日が始まって、家族みんな、守ってもらう必要があります。朝、ほんの少しでいいからお祈りする家族に、神様の恵みはすぐに働いてくれます。朝のお祈りでいただく恵みが昼頃届くのでしたら、間に合いません。神様のくださるお恵み、特に教会でいただく御聖体やゆるしのお恵みは、すぐに働き始めるのです。

すぐに働いて、わたしたちを守ってくださる。御聖体の恵みは、そのようなお恵みです。毎週お恵みにあずかってください。そして、恵みを忘れない人になってください。家族の中で、「神様の恵みはすぐに働き始めるんだよ」と自信を持って言える人になってください。これから、初聖体の決意表明をしましょう。



年間第 8 主日 (ルカ 6:39-45)

心からあふれ出ることを語るために

今週は、堅信式を終えた中学生を意識して 2019 年説教を使いました。四旬節を前にして、神を見る目が開かれるために、私たちにとって何が視界を遮る「丸太」となっているか、考えてみましょう。

ある年、堅信式を終えた中学生と一緒に、二週にわたってイスラエル巡礼をしたときの写真を見ました。中学生に説明をしながら実感したことは、聖地巡礼は私たちを「心からあふれ出ることを語る」そういう人に変える力があるのだな、ということでした。

イエスが四人の漁師に声をかけて弟子にする。その情景はガリラヤ湖だからこそ思い浮かんでくるのです。湖は日本も数多くあるでしょう。けれども、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」(マタイ 4・19) この言葉が浮かぶのはガリラヤ湖だからこそなのです。

振り返って、このイスラエル巡礼は、「自分の目から丸太を取り除く」旅だと思いました。今まではっきり見えてなかったことが見えるようになって、キリスト者として生きる、キリスト者でない人に道案内ができる。そのような経験をさせてくれる機会でした。私たちはどこかの時点で、「自分の目から丸太を取り除く」体験が必要なのです。

ある人は聖書朗読を通して、「自分の目から丸太を取り除く」体験を積みまします。聖書朗読を依頼される人全員が聖地巡礼を体験すれば素晴らしいですが、せめて巡礼した人の話に耳を傾けるなら、朗読の中身が「心からあふれ出ることを語る」ものになります。

「ミサに行く」ことだけでも、「自分の目から丸太を取り除く」体験が必要です。二度目のイスラエル巡礼はクリスマス後の「降誕節」でした。「主の公現」のミサをガリラヤ湖畔の「ペトロの首位権の教会」そばにある野外祭壇でささげました。練り上げミサでした。

翌日の日曜日は、ヨルダン川のベタニアという場所を訪ねました。ヨルダン川河畔は木が生えていましたがほかは見渡す限り砂漠です。そこに教会がぽつんと建っていて、どこから集まるのか、司祭・修道者・信徒がわんさか集まって、「主の公現の祝日のミサ」をおこなおうとしていたのです。一日かけて集まり、ミサに参加します。

その様子から、私は「自分の目から丸太を取り除く」体験を積みましました。ただ一つのこのために、人々が集まっていたのです。このミサに自分が生かされていると知っているから、集まることができるのです。

聖書を朗読し、聖歌を歌い、共同祈願を唱え、ミサの受け答えをする。生活の中で祈りをささげて生きる。どれも「心からあふれ出ることを」実行するチャンスです。何があなたの視界を遮る「丸太」となっているか考え、「自分の目から丸太を取り除く」体験を積みましましょう。

黙想会、クルシリヨ、聖地巡礼、赦しの秘跡、いろいろ考えられます。だれもが「自分の目から丸太を取り除く」必要のある人間なのです。



灰の水曜日 (マタイ 6:1-6,16-18)

田平教会家族で、衣ではなく心を引き裂く

本来ならミサに参加できたであろう皆さん。灰の水曜日を、灰をかぶらずに迎えた年があったのでしょうか。御復活を、復活徹夜祭ミサをささげずに迎えた2年前を思い出しました。2年前、ただ一人で復活徹夜祭ミサをささげながら、「こんな御復活は二度と迎えたくない」と思ったのでした。

今日、皆さんと灰を頭にかぶる式をすることができず、一人でミサをささげながら、本当に悔しさでいっぱいです。しかし一つのことを考えが向かいました。健康に不安がなくて灰の水曜日のミサに参加できる人は、実は限られた人ということです。新型コロナの状態になるずっと以前から、灰の水曜日のミサに参加できなかった人はいたはずで

かなり前から灰の水曜日のミサに参加できず、灰の式を受けることができなかつた方々は、この日をどのように迎えていたのでしょうか。この日のミサの第一朗読で預言者ヨエルはこう言います。「主は言われる。『今こそ、心からわたしに立ち帰れ、断食し、泣き悲しんで。衣を裂くのではなく、お前たちの心を引き裂け。』」(ヨエル 2・12)すでに、灰の水曜日のミサに行きたくても行けないこと、灰の式を受けることができない寂しさなどで、「心を引き裂かれる思い」でこの日一日過ごしていたのだと思います。

ひょっとしたら、灰の水曜日のミサに参加している信者たち、ミサをささげている司祭たちは、「私たちは灰の水曜日のミサもささげているし、灰の式もちゃんと受けている」そんな「ほんの少し優越感を持って」ミサに与っていたのかも知れません。

「私たちは灰の式を受けた者だぞ」みたいな心がほんの少しでもあるなら、これを機会に私たちこそ「衣を裂くのではなく、お前たちの心を引き裂け」という言葉に耳を傾ける必要があります。灰を受ける儀式は立派でも、受けたくても受けられない人の気持ちに寄り添っていなかったかも知れないからです。

私たち田平教会家族は今年、「灰の水曜日のミサに参加したくてもできない」「灰の式を受けたくても受けられない」同じ目に遭っています。同じ境遇にならないと分からないことがあります。今こそ、「衣を裂くのではなく、お前たちの心を引き裂け」という預言の通り、悔い改める姿勢をもう一度見つめ直しましょう。

私がお祈りの礼拝祭儀に参加できている時、参加したくても参加できない人を一人思い出しましょう。その人の心を携えて、今参加できている祭儀に臨みましょう。この心がけが身についたら、来年の灰の水曜日は今まで以上に恵み深い日になるでしょう。それはそのまま、今まで以上に恵み深い御復活の祝いを迎えることに繋がっていくのです。



四旬節第1主日 (ルカ 4:1-13)

試練の中で「貧しい人の友イエス」を示してくださった

2月23日、日本の教会はペトロ中村倫明長崎大司教の着座式ミサを祝いました。嚴重な感染対策のため参列者は300人ほどでしたが、多くの人の目が中村大司教様に注がれている、そう感じさせる熱量がありました。あれはきっと聖霊の働きだったのでしょうか。そして、その期待に十分応える決意表明をミサの中で示していただきました。

いくつか、大司教様の決意表明と受け取れる部分を紹介します。一つは、大司教となられて新調された牧者の杖「バクルス」です。材質は「オリーブの木」でした。パレスチナ地方の実際の羊飼いが持っている杖をイメージしたと聞きました。聖書には「鉄の杖」という表現がありますが、それは力で押さえつける印象です。中村大司教様は、優しく教え導く姿を印象づけるために、材質を木にこだわったのでしょうか。

あと一つ、大司教様の決意表明を感じさせたのは、ミサの「奉献文」です。ミサの式次第の中で「本体部分」と言える祈りです。通常、第一から第四の奉献文まで使用されています。皆さんの祈り書には、その中でも特に使用頻度の高い「第二奉献文」「第三奉献文」が掲載されています。

ですが中村大司教様は、それら通常の奉献文ではなく、「種々の機会のミサの奉献文・四（貧しい人の友、イエス）」これを用いられたのです。手元にある儀式書によれば、2014年に増補版が発行されたときに「入手困難になっている奉献文であるため」掲載されたとあります。少なくとも8年前には目に触れることができたわけですが、この8年間、私は一度も唱えたことがありませんでした。

けれども着座式ミサで実際に唱えてみて、中村大司教様が、今の教皇フランシスコと同じく「貧しい人々の友となる」その決意を表明されたのだと確信しました。教会が、小さな者を心にかけることを忘れたら教会でなくなりますよと、この奉献文を司教司祭全員で唱えて、確認する機会としてくださったわけですね。

最後になりましたが、今週は四旬節第一主日です。イエスが荒れ野で四十日間悪魔の誘惑を受け、それをすべてしりぞけていきます。この記事が福音書に収められているのはイエスご自身のためではありません。誘惑に何度も負け、打ちのめされる弱い人間のために、イエスが先頭に立って模範を示すことを教えるのが目的です。

人が飢えに苦しんで弱り果て、権力や富に目が眩んで自分を見失い、神を信じられなくなったとしても、それでもイエスは人間を見捨てることなく、常にともにいて父のいつくしみと母の優しさを注いでくださいます。イエスが貧しい人々の友となってくださったように、中村大司教様も友となってくださり、一緒に歩いてくださる。その決意表明が込められている。そう感じました。

今私たち人類は、四十日の荒れ野での試練の中にいるような状態です。それでも神は新たなリーダーを与えてくださり、希望を示していただきました。復活のその時を信じて、私たちも中村大司教様とともに、神を信じ、神を証ししていくことにしましょう。



四旬節第 2 主日 (ルカ 9:28b-36)

父なる神のご意思、それは「イエス・キリスト」

四旬節第 2 主日は、「御変容（イエスの姿が変わる）」の場面が取り上げられる日曜日です。「祈るために山に登られた」（9・28）はタボル山でしょう。イスラエル巡礼の体験がよみがえります。

タボル山の頂上に登ると、辺り一帯を見渡すことができます。なぜならこの山のほかに小高い場所がないからです。そのため、この山ならではの気象現象が起こります。地表の高温で乾燥した空気が山にぶつかり、山頂では空気が急激に冷やされ、時に霧となって山を覆うのです。

「ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。」（9・34）もともとガラヤ湖で漁をして生活していたペトロ、ヨハネ、およびヤコブは、この現象に大いに恐れを感じたことでしょう。

気象学的な説明をしなくても、三人の弟子が見た光景は、彼らを恐れさせるに十分だったと思います。ペトロの動揺ぶりは、「仮小屋を三つ建てましょう」（9・33）と提案したことにも現れています。

人が家を建てるのは、その場所に定住しようとしたことを表しています。家は人が定住し、人生を完成させるための場所です。しかしイエスはこれまでもずっと、町や村を移動しながら神の国を宣べ伝えてきました。御父の望みをすべての人に伝え、救いの計画を完成させるために、一つの場所に留まり続けるわけにはいかないのです。

約 60 年前に開かれた第二バチカン公会議は、地上の教会のことを「旅する教会」と表現しました。それまでの教会の姿は「キリストの神秘体」という表現でした。それぞれ、教会の特徴を言い当てているわけですが、「旅する教会」という表現は「キリストの神秘体」という表現よりさらに「完成に向かって歩んでいる教会の姿」を表しています。

教会は立ち止まらない。現代の諸問題と正面から向き合って、すべての人を受け入れる場所となりたい。その決意が「旅する教会」に込められていました。イエスもまた、一時的に示された輝かしい場面に立ち止まらず、エルサレムで待ち受けている十字架上の栄光へと向かわれるのです。そして弟子たちもイエスに聞き従うことが求められます。「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」（9・35）。

「これこそイエスの本来の姿だ。」弟子たちは輝く姿のイエスを見て確信したでしょう。けれども御父がイエスを通して示そうとする御意思はもっと先にありました。弟子たちが「ここにある」と立ち止まった場所にではなく、イエスが最後に足を止めた場所、十字架上にあるのです。だからこれからもイエスに聞き従う必要があります。

父なる神の御意思、それは突き詰めると「イエス・キリスト」です。いまだに争い合い、対立し合う国があります。武力で解決しようと躍起になっている人がいます。平和な世界、平和な社会さえ、人間は維持することができない愚か者です。その人類を救うために、イエスは山上で

の栄光で足を止めず、エルサレムで待つ十字架へと向かうのです。

本日、ミサの奉獻文は「ゆるしの奉獻文（二）」を用います。テーマは「人類の和解」です。これから始まる感謝の祭儀、その心の準備として、「私たちの平和・キリスト」という聖歌を歌うのでしばらく聞いてください。

四旬節第 3 主日(ルカ 13:1-9)



四旬節第3主日 (ルカ 13:1-9)

これから御聖体のイエスがともにいてくださる

本日は初聖体を受ける二名の子供たちのためにお話しします。あいにく、今週の福音朗読は初聖体の子供たちにはちょっと難しいし、内容が理解できたとしても、「悔い改めなければ、皆同じように滅びる」という厳しい警告をする内容なので、「中田神父様は紐差教会の黙想会指導のために出かけてきたよ。そして講話をしながら、神父様も一緒に心を入れ替えてきたよ。」それだけ話しておこうと思います。

さてこれからは、初聖体を迎えた子供たちと、今日大切なイエス様をお迎えするので、最後の心の準備をすることにしましょう。これまで保育園で、しっかり準備をしてきて、「御聖体にはどなたがおられますか？」と聞かれてもすぐに答えられるはずですが。最終試験だけ、ここで終わらせておきましょう。一人ずつ、同じことを聞きます。一人ずつ答えてください。ペトロ山内晴くん。御聖体には、どなたがおられますか？ヨゼフ福井琉太くん。御聖体には、どなたがおられますか？

ちゃんと答えることができましたね。このミサの中で、今日初めていただく御聖体には、イエス様がおられるのです。私たちの中に来てくださって、私たちとこれからずっとともにいてくださいます。御聖体の見える形は、薄くて、すぐに溶けてしまうものなのだけれども、御聖体におられるイエス様は、皆さんの中に居てください。

一つ約束をしてください。御聖体は、ミサに来て、ミサの中で拝領します。ミサに来なかったら、御聖体もいただけません。「一回もらったからもういいや」と言って、教会に来なくなったら、御聖体のお恵みも無くなってしまいます。約束してほしいことは、「これからも続けて、教会に来て、御聖体を拝領するよい子になりますか？」ということです。

一人ずつ、同じことを聞きます。一人ずつ答えてください。ペトロ山内晴くん。あなたはこれからも教会に来て、御聖体を拝領するよい子になりますか？ヨゼフ福井琉太くん。あなたはこれからも教会に来て、御聖体を拝領するよい子になりますか？立派な返事を聞きました。ここに集まった皆さんが、二人の返事を目撃者です。

さっきから神父様は、二人の名前にある言葉を付けて呼んでいますね。「ペトロ」山内晴くん。「ヨゼフ」福井琉太くん。この「ペトロ」とか「ヨゼフ」とか、この言葉は何ですか？もしかしたら、「分かりません」と答えるかも知れません。多分そうかも知れないと思って、今日説明します。よく理解してください。

この「ペトロ」「ヨゼフ」という言葉は、「霊名」とか「洗礼名」と言って、皆さんが洗礼を受けたときに付けてもらった聖人の名前なのです。洗礼式で神様の子供にしてもらった時に、聖人の名前を付けてもらって、その聖人に見倣うためです。晴くんは「ペトロ」を、琉太くんは「ヨゼフ」を見倣って立派な教会の人になってほしい。そう願って付けられた名前です。繰り返すけど、「霊名」とか「洗礼名」と言います。

では尋ねましょう。「ペトロ」ってどんな人ですか？「ヨゼフ」ってどんな人ですか？それから、「ペトロ」を思い出す特別な日がありますか？「ヨゼフ」を思い出す特別な日がありますか？ここまで説明して、初聖体の心の準備を完成させましょう。

ペトロは、イエス様に「わたしに従いなさい」と声をかけられて、弟子になった人で、十二人の弟子の一番弟子です。イエス様から信頼されて、「天の国の鍵」を授けられて、大切な「イエス様を信じる人の世話」を任せられました。イエス様から大きな仕事を任せられて、立派に仕事をした人です。そしてペトロを特別にお祝いする日は6月29日です。

ヨゼフは、イエス様のお母さんマリア様の夫で、神の独り子イエス様を大切に守り育てた方です。イエス様が生まれて、ヘロデに命を狙われたとき、マリア様とイエス様を連れてエジプトに避難して、守り抜きました。誰よりもよく働いて、イエス様が12歳になって立派に育つまで見守ってくれました。ヨゼフを特別にお祝いする日は3月19日です。

二人とも、すばらしい洗礼名をもらっているのです、これからも楽しみに教会に来て、ミサに参加して御聖体をいただきましょう。今日初めて御聖体をいただきます。特別な味がするかも知れません。お父さんお母さんに「御聖体はどんな味だった？」と聞かれたら、「ヒミツだよ」と言って構いません。あなただけの、特別な御聖体、初めての御聖体だからです。これから自分の言葉で決意表明をして、感謝の祭儀に移ることにしましょう。

四旬節第4主日(ルカ 15:1-3,11-32)

四旬節第4主日 (ルカ 15:1-3,11-32)

彼は我に返って言った



「何もかも使い果たしたとき」(15・14)「彼は我に返って言った」(15・17)。ロシアのウクライナへの軍事侵攻には憤りを覚えます。今週の福音朗読「放蕩息子のたとえ」を読むとき、人間の姿は昔も今も変わらないのかと考えさせられます。それは、「何もかも使い果たしたとき」「我に返って」自分の愚かさに気付くのだと思います。

愚かさに気づくのは、「何もかも使い果たしたとき」です。命令通りに動く軍隊を使い果たし、命令通りに動く政権幹部が離れ去ったとき、彼は我に返ってくれるのかも知れません。今日は、ウクライナとロシアの平和を願って、「ロシアとウクライナをマリアの汚れなきみ心に奉獻する祈り」を唱えます。10分以上かかる祈りですが、沈黙のうちに、静かに心を合わせてお祈りください。

(カトリック中央協議会ホームページより掲載)

<https://www.cbcj.catholic.jp/2022/03/24/24408/>

四旬節第5主日(ヨハネ 8:1-11)



四旬節第5主日 (ヨハネ 8:1-11)

ウクライナとロシアの人々ともイエスはともにおられる

(説教の枕「エイプリルフールの夢」の後) とりとめのない話にお付き合いくださり、ありがとうございます。説教に入りましょう。「これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。」(8・9)最後に、イエス一人と、真ん中にいた女性が残りました。ここに私は目を留めたいと思います。

今年、チャンスを受けて紐差教会で黙想会の話をしました。皆さんの中にもすでに YouTube で講話の様子を視聴された方もおられるでしょう。紐差教会での黙想会のテーマは「イエスとともに歩む」でした。イエスが私たちとともに歩いてくださるから、イエスに信頼して、誰かのために一緒に歩いてあげる人になってください。そういう展開でした。

実は今週の福音朗読でも、「ともに歩いてくださるイエス」の姿が描かれています。姦通の現場で捕らえられたという女性を排除し、追い詰めようとしている人々の中で、イエスだけはこの女性に寄り添ってくださいます。そして最後に、「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」(8・11)と言ってくださいました。

ここには直接触れられていませんが、「これから」についても、イエスは女性とともに歩んでくださることを匂わせています。女性は、その場を切り抜けられてホッとした、それ以上の支えをイエスから受け取ったはずですが。罪に押しつぶされそうな人に誰も寄り添ってくれないことを見せつけられたのですが、そんな中でもイエスは寄り添ってくださる、ともに歩いてくださることを証明してくださったのでした。

紐差教会の黙想会の中で、ふと思ったことがあります。ロシアがウクライナに軍事侵攻して、ウクライナでは子供を含む民間人が多数犠牲になりました。ウクライナ兵を含めて、三千人以上犠牲になったかも知れませんが。また同時に、戦争を仕掛けたロシア軍の、前線にいる兵士達は、報道によるとウクライナ国民の数倍の犠牲者が出ていると言われています。

仮に、ウクライナ国民の犠牲者が三千人、ロシア軍の兵士の犠牲者がその二倍を超える七千人だとしましょう。一ヶ月で一万人の犠牲者は、過去のどの戦争よりも犠牲者が出るスピードが速いのです。これだけの犠牲者が不必要に出たことを見て、ある人たちは「神様は本当にいるのだろうか」と考えたことでしょう。そう考えるのも無理はありません。

しかし私はすぐにこう考えたのです。イエスは、ウクライナ国民にもロシア国民にも、ともに歩いてくださっている。ウクライナ国民が爆撃や砲弾の中を逃げ惑うあいだ、イエスもともに逃げ惑い、怯える人々とともにいてくださっている。そして残念ながら犠牲者が出ると、その犠牲者と同じだけのイエスが死んでくださっているのだ。そう考えまし

た。

またウクライナの国土を踏みにじっているロシア兵とも、イエスはともに歩いてくださって、まるでエマオに向かって一緒に歩いていた弟子たちのように、一緒に歩いていることを気づいてくれなくとも辛抱強く説明し、心に語りかけたように、攻撃を止めないロシア兵に辛抱強く語りかけ、正しい心を取り戻すように呼びかけておられる。そしてロシア兵にも犠牲者が出ると、ともに歩んでおられるイエスもロシア兵とともに死なれているのだ。私はそのように考えたのです。

ですから「この戦争を見て『神様は本当にいるのだろうか』と疑う人に、『ウクライナ国民とロシア国民のために一万回死んでくださるイエスが神でなくて誰でしょうか？生と死を、寄り添ってともにしてくださる方は、神でなくて誰でしょうか？』」と答えたいのです。

来週から聖なる一週間が始まります。イエスが私たちのために十字架にかかって死んでくださり、復活なさる聖なる一週間ですが、いまだにイエスの十字架上の死を神がなぜ引き受けなければならないのか疑問に思う人もいるかも知れません。今週の説教が、そのことを理解する助けになればと思っています。ウクライナ国民にもロシア国民にもともに歩んでくださり、亡くなっていく人々とともに今も死んでくださる慈しみ深い方が、私たちの信じる神なのです。

最後に、ミサ依頼を貼る掲示板には、**2022**年度の教区司祭人事異動を掲載しております。中田神父は6年前の4月6日に田平に赴任し、6年が過ぎたのでひょっとしたら異動かもしれないなあ、と思っておりました。しかし結果は、一覧表の通りでほんのわずかの人事異動だけが発令されただけでした。大司教様が考え抜かれた結果だと思えます。

私も気持ちを入れ直して、田平教会の皆さんと、この一年をともに歩み、喜びと悲しみ、収穫と、場合によっては苦しみも、ともにしたいと思えます。どうか今年も一年よろしくお付き合い願います。

受難の主日 (ルカ 23:1-49)

御父は和解の道のりを見守っておられる



四旬節中、ミサの奉献文に「ゆるしの奉献文(二)」を使うようにしてきました。この奉献文には「人類の和解」という明確なテーマがあります。この奉献文中で中田神父が第一に祈ってきたことは、ウクライナとロシアの人々の和解です。敵対することをやめて、和解できるように、和解のその時まで、私はこの奉献文を使い続けようと思っています。

「ゆるしの奉献文」の中に「キリストこそ救いのみことば、罪人に差し伸べられる手、まことの一致への道です」という祈りがあります。和解のためには敵対する両者が手を取り合わなければなりません。両者の手を握らせるのが、まことの一致への道であるキリストなのです。

和解のためには、敵対する両者が歩み寄らなければなりません。今日の受難の朗読の中でも、指導的立場にある人、群衆、イエスを信じる人々、すべてがイエスに引き寄せられています。イエスこそ、まことの一致への道です。どのような形であれ、イエスに近づき、歩み寄らなければ、一致点は見いだせないのです。

本日朗読された「ルカによる主イエス・キリストの受難」は、御父の側から和解の道を見守っておられると感じます。「和解のいけにえ」として差し出されたイエスの姿を、私たちは朗読を通して辿ってきたのです。イエスは「和解

のいけにえ」なので、ご自分を弁護しません。

ちなみに、聖金曜日の「ヨハネによる主イエス・キリストの受難」は、御子イエス・キリストのほうから和解のために手を差し伸べる描き方です。イエスから語りかけられるたびに、兵士と千人隊長、大祭司、総督、ユダヤ人たちが和解の席に着き、導かれていくのです。

もちろん、完全に導かれ、過ちを認めるものではありません。それでもイエスは和解のために最後まで力を尽くされ、人間の努力で足りない部分は、ご自身の命によってあがなってくださいました。ロシアの戦争行為も、人間の反省だけでは和解にたどり着けません。人間の努力で足りない部分を、今もイエスはご自分の命であがなってくださるのです。

本日受難の主日は、聖木曜日、聖金曜日の典礼に参加できない人のための典礼でもあります。イエスこそ、自分たちの言い分を一步も引かずに歩み寄れない人たちの一致への道です。イエスこそ、過ちを認めることのできない弱い人間を和解させる救いの手です。イエスの力により頼みましょう。

和解は、目に見える形では敵対する人が近づき、手を取り合うことで実現しますが、見えない部分ではイエスの力がなければ実現しません。この一週間、御復活の日まで「救いのみことば、罪人に差し伸べられる手、まことの一致への道」であるイエスに祈り続けましょう。和解の席に、人類すべてが座ることができますように。

聖木曜日 (ヨハネ 13:1-15)

互いに足を洗い合い、イエスの食卓に着く



聖木曜日、イエスはイスカリオテのユダにも和解への道を示しました。「皆が清いわけではない」と明言されても、足を洗ってくださり、誰も取り残されないように心を砕かれたのです。

イエスは「先生と弟子」の関係を超えて、和解のために僕の仕事を引き受けました。模範を示して、イエスが再び食事の席に着かれたことに目を留めましょう。これは過越の食事ですが、先生ができるのだから、弟子がそれをできないはずがない。そのことを確かめる席に着いたという意味もあるでしょう。身を低くすれば、できない和解はないのです。

この晩さんの席に着いた十二人の弟子たちは、心ではさまざまな思いが渦巻いていました。イエスが王座に着いたら右と左に座りたいと考える弟子がいました。財布を預かっていて中身をごまかしている弟子もいました。だれがいちばん偉いだろうかと議論したりもしていました。

ペトロはその中で最も素朴な弟子だったかも知れませんが。「あなたのためなら命を捨てます」と言えました。実際そうなる運命でしたが、もちろん自分の力ではありません。いよいよの場面ではイエスを「知らない」と三度否認します。それでも、ペトロの正直さは特別でした。

ペトロはイエスから足を洗ってもらうとき、

「主よ、足だけでなく、手も頭も」と求めました。何かを表しているのではないのでしょうか。「手」は人間の働きを、「頭」は人間の考えを、それぞれ表しているのではないのでしょうか。働きのすべて、考えのすべてをイエスに清めてもらおう。食卓に着く準備、一つのテーブルに着く準備がここに示されているのだと思います。

イエスの食卓に、名誉を求めている人、財布の中身をごまかす人、どこまでも素朴な人、さまざまな人が食卓に着きました。イエスが用意してくださる食卓には、どんな人でも席に着くことができます。ただ、食卓に着くすべての人が、互いに相手よりも低くなる、互いに仕え合う、その準備が必要です。

今日ここに集まった私たちすべてが、イエスの食卓に着くことができます。準備として、互いに相手よりも低くなることを引き受ける覚悟があるのでしょうか。「あの人よりはマシだ」と考える人がいないのでしょうか。その人の足を洗う、その人に仕える覚悟があるのでしょうか。

こうしている今も、ウクライナとロシアは停戦交渉をしていることでしょう。イエスがおられるテーブルで一つになって、交渉をまとめてほしいと切に願います。イエスがおられるテーブルであれば、どんな事情があっても席について話し合えると信じます。聖木曜日、主の晩さんの食卓を囲みながら、世界中の人々が一日も早く平穏な日々を取り戻せるよう、心を合わせて祈りましょう。

聖金曜日(ヨハネ 18:1-19:42)

聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

和解のためにイエスは十字架を取られた



聖木曜日、イエスはイスカリオテのユダにも、和解への道を示そうとされました。聖金曜日、ご自身を犠牲にして、罪の責任を負わなくて済む方法を探っていた残酷な宗教指導者たちにも和解の道を残してくださいました。

十字架上の死をもってしても指導者たちは和解に応じなかったのですが、唯一「イスラエルの教師」とイエスから呼ばれたニコデモは、アリマタヤ出身のヨセフとともにイエスの遺体をユダヤ人の習慣に従って埋葬してくれました。ニコデモはイエスのうちに光を見だし、初めてイエスを訪ねたときから光に照らされて生きていたのです。

さて「ヨハネによる主イエス・キリストの受難」の朗読全体を見渡したとき、「働きかけるイエスの姿」が受難の主日の朗読よりも強調されているのに気づきます。兵士たちと下役がイエスを捕らえようと近づいてきたとき、イエスは声をかけました。「だれを捜しているのか。」

イエスを兵士たち下役たちから守ろうと大祭司の手下に打ってかかったペトロにも声をかけました。大祭司カイアファのぶしつけな質問にもていねいに答弁します。ピラトにも、問いかけの何倍もの返事をしています。

裁判が終わって十字架のもとでも、母マリア、愛する弟子に声をかけます。これらはすべて、和解のための働きかけとなったのです。イエスをあからさまに拒む人にも、怖くてイエスの弟

子であることを公にできない人にも、泣きながらイエスに従う人にも、和解のためにイエスの働きが必要です。ご自分の人としての最後の時間をすべて使って、和解の手を差し伸べてくださったのです。

「和解の手を差し伸べるイエス」は、最後に十字架にはりつけにされました。実際にそうだったかは別として、手のひらに釘を打たれた姿は、「和解の手」「差し伸べられた手」が、今も私たちのために開かれているからでしょう。

この釘打たれ、開かれたままの手を見て、ここに集まった私たちは何を考えるのでしょうか。中田神父は、「差し伸べた私の手を取り、和解に応じて欲しい」と願っているように思えます。血まみれになって和解の手を差し伸べてくださる主に比べると、自分はなぜ血まみれになろうとしないのか。恥ずかしくなります。

「恥も外聞も捨てて」という言い方がありません。イエスが十字架の上で示す姿そのままです。私たちはいつになったら、信仰のためならイエスと同じ姿になっても構わないと考えるのでしょうか。信仰によって招かれた生き方に、いつになったら命をかけ、血まみれになる覚悟ができるのでしょうか。

私たちはすべてを与えられた者なのに、すべてを与えてくださった方にすべてを委ねることができないあわれな身分です。それでも十字架上のイエスは、今も手を開いて、私たちに和解の手を差し伸べておられます。開かれたイエスの手を取るか否かは、私たちに委ねられています。

復活徹夜祭 (ルカ 24:1-12)

開かれた手を受け入れ、和解のために働こう



主の御復活おめでとうございます。毎年同じ事の繰り返しですが、復活徹夜祭の説教は、聖金曜日説教準備の後30分も経たずに取りかかっています。人間的なことを言うと、さっきまで「十字架の手は開かれていますよ、あなたはこれを見てどう答えますか」と考えていたのに、切り替えが早いなあという思いがあります。

そしてこうも思います。復活徹夜祭の福音朗読は、A年こそ復活したイエスが現れますが、B年C年の朗読では「天使の出現」と「空の墓」で延々、復活おめでとうございますと説教するのです。どうにかならないものかなあと思います。皆さんに言ってもしかたのないことですが。

しかし空の墓でも、香料を持って出かけた婦人たちを動かすに十分でした。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。」輝く衣を着た人は、イエスは復活なさったと証言し、婦人たちを次の行動に駆り立てたのです。

それでも、婦人たちに勇気を与えている力はどこから来るのでしょうか。もちろん復活したイエスが与えてくださっているでしょうが、何か見える「しるし」があるのでしょうか。

やはり私は、金曜日の出来事をイエスとともに辿ってきた。そのことが婦人たちを行動に駆り立てているのだと思います。

婦人たちは選ばれた弟子たちよりも近くでイエスの最期を見届けました。開かれた和解の手、血まみれの手を取り、イエスによる和解に加わりました。和解のために手を開いて十字架の上で命をささげ、復活し、イエスはその手を取った人と今ここでともにいて、次の行動へと駆り立てているのです。

婦人たちの次に和解のために差し伸べられた手を取り、呼びかけに応じる相手は弟子たちです。そのため婦人たちは復活したイエスに送り出され、弟子たちのもとに急ぎました。

出来事を告げられたペトロは墓へ行き、何をなすべきかを考えます。ペトロは私たちすべての象徴です。何をすることも力が足りない私たちが、イエスのために何かお手伝いするにはどうすれば良いのか。考える必要があります。

それは、何はともあれ空の墓を訪ねて、その後復活したイエスに和解の手を差し伸べてもらい、その手を取ることで、和解のために差し出された手は、まだ釘跡の生々しい手かも知れませんが、その手に釘を押し当てたのは私の罪だったかも知れません。

そうと分かっているとしても、私たちは復活したイエスの手を取らなければ、イエスの弟子でなくなってしまう。私たちがその手に釘を押し付けたのに、それでも復活の主は私たちに手を差し伸べてくださいます。私たちはそのいつくしみによって、死んだも同然の状態から造り変えられ、復活の証人としてもらえるのです。

復活の主日(日中)(ヨハネ 20:1-9)

あなたは復活の証人に造り変えられた



あらためて主の御復活おめでとうございます。この説教もまた、さっきまで徹夜祭の説教を書いていて、その後に準備したものです。よくまあ頭が切り替わるものだと感心します。

復活の主日日中のミサで朗読される箇所はヨハネ福音書 20 章です。典礼暦が A B C 年あるのにほかの選択肢はありません。「空の墓」がさらに強調されています。そして弟子たちは、復活徹夜祭の説教で触れたように、何はともあれ「空の墓」を訪ねることから始めます。

今年の聖週間説教は、テーマを決めて準備にかかりました。それは「イエス・キリストによる人類の和解」です。多少テーマに合わせようと無理をしたかも知れませんが、それでもあえて、「和解」をもたらず方は「仲介者イエス」を置いてほかにないことを確認したかったからです。

ウクライナの凄惨な映像の中で、教会が映っていました。テレビに映っていた教会の中でも「イエス・キリストによる和解」を祈り続けていたと思います。今年の聖週間は、ロシアのウクライナへの侵攻が終わって、両国が和解できるように皆さんと一緒に祈りたかったのです。

そしてこの聖週間の締めくくりとなる日中のミサの中で、空の墓を訪ねたペトロともう一人の弟子とともに、復活の証人に造り変えられたいのです。どんな人にも和解の手を差し伸べ

るイエスを捜し求めたが墓は空だった。それでもイエスは和解のために手を差し伸べてくださるはず。それはどこでどのように行われるのか。

イエスが愛しておられたもう一人の弟子は気づきました。「イエスは必ず死者の中から復活されることになっている」と。和解を必要としているすべての人は、これからは墓に納められたイエスではなく、復活してくださったイエスと和解させてもらおうのだということです。

この後弟子たちはガリラヤへ行くように言われます。ガリラヤはイエスと弟子たちが宣教活動を繰り広げた場所です。今回ガリラヤは復活したイエスと和解するための場所となります。復活節第二主日の朗読では「あなたがたに平和があるように」とイエスが招いています。

復活したイエスから和解の手を差し伸べられて、人は断ることができるようでしょうか？ 私たちはその手を黙って握り、新たな気持ちでイエスについていく。できることはこれだけです。

私たちの至らなさを十字架にはりつけ、復活して私たちにゆるしの恵みで覆って証し人に造り変えてくださる。「忙しくてイエスを人に伝える暇が無い」と、本当に言えるでしょうか。

復活したイエスは、私たちが生活の中心にしている場所、「私たちのガリラヤ」で待っておられ、和解の手を差し伸べてくださいます。あなたはその手を、暇を見て握るのでしょうか。真っ先に手を取り、生活の中心にお迎えするのでしょうか。あなたが本当にイエスを信じているかが、今問われているのです。

神のいつくしみの主日(ヨハネ 20:1-9)



神のいつくしみの主日 (ヨハネ 20:19-31)

復活したイエスは弟子たちの真ん中に立ってくださった

教皇聖ヨハネ・パウロ二世から「神のいつくしみの主日」と名付けられた復活節第二主日を迎えました。この日は「トマス」が最も目立つ福音朗読です。私もトマスに注目して説教をまとめてみましたが、今年は新しい気付きもありました。

朗読の中で、トマスが目立っていて見落としてしまう記述があります。それは 20 章 26 節です。「さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。」

トマスも一緒にいたという家は、またもや「戸にはみな鍵がかけてあった」のです。八日前に、復活したイエスが弟子たちの集まる場所に現れ、「弟子たちは主を見て喜んだ」(20 節)はずでした。一週間も経たないのに、弟子たちが皆集まったその家の戸にはみな鍵がかけてあったというのです。弟子たちの喜びは何だったのでしょうか。

そうしてみると、出遅れた感のあるトマスでしたが、ほかの弟子たちとの差は大した差では無かったのかも知れません。先に復活の主と出会った弟子たちの心は、まだまだ弱いままだったのですから。この点は、30 年同じ聖書の箇所を読み返して、初めて気づいた点です。

実は私には、一緒に神学校に入学したけれども叙階が私より遅れた同級生が二人います。一人は長崎教区の司祭、一人は福岡教区の司祭です。私の中では、今の今まで、少し遅れたその同級生に、「私たちは先に司祭になった」という意識があったかも知れません。

事実としてはそうですが、今週の福音朗読と重ねて考えるとき、「叙階の日付が多少違っていても、その差は大した差ではなかった。ほんの少しでも優越感を持っていたとしたら、とんでもない勘違いだった」そう思い始めています。

トマスが頑なな態度を取ってその弱さを表しましたが、ほかの弟子たちも八日経ってご出現に立ち会うとき、家の戸には鍵をかけていた、そんな弱さの中にいました。誰も、自分が優れていると人に威張ることなどできません。トマスだけが弱い信仰を持っていたのではなく、すべての弟子が未熟な信仰しか持ち合わせていなかったのです。

皆、何かしらの弱さを持っていますが、復活したイエスは弱い私たちを強めるために、真ん中に立ってくださいます。朗読の中に二度とも描かれています。「イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた」(19 節 26 節)のです。

「真ん中」とはどの場所でしょうか。それは生活の真ん中という事です。自分のことで精一杯だったり、誰かを犠牲にして自分が成り立っていたり、さまざまな弱さがある。その生活の真ん中に復活したイエスが立って、私たちの信仰を強め、復活の証人にしてくださるのです。あとは私たちの生活の中心にイエスを迎えることができるように、場所を用意しておく必要があるのではないのでしょうか。



復活節第3主日 (ヨハネ 21:1-19)

何度問われても「あなたを愛しています」

飯塚教会に4月に異動になった福岡教区の同級生、「ちょっと遅れて叙階した」無二の親友を訪ねてきました。カーナビでは近くに来ているはずなのに約束の時間も過ぎて冷や汗をかきました。途中、「麻生病院」「スーパーASO」「麻生看護大学校」など、えらく「麻生」の付く建物が多いなと思っていたら、麻生一族は飯塚の出身のようです。

復活節第3主日は長崎教区に限って言えば転勤した教会で新しく赴任した主任司祭が主日ミサデビューする日です。私もこれまでの転勤でいろいろ思い出がありますが、二つだけ取り上げるなら、浜串教会でのミサと田平教会でのミサです。

浜串教会には赴任するため長崎港からフェリーに乗って奈良尾港に降り立ちましたが、自分で車を運転していたのでそのまま港の広い駐車場に出てしまいました。ところが小教区の皆さんは乗船客が乗り降りするターミナルの中で、花束を準備して今か今かと待ち構えていたのです。

私は「あれ、いないなあ。教会で待っているのかな?」と思ってそのまま車を走らせ、浜串教会に向かいました。ターミナルで待機していたたくさんの信徒、シスター、上五島地区の神父様方を置き去りにしていったのです。これは取り返しのつかないしくじりとなりました。そのことを含めて、復活節第3主日ミサで説教したわけです。

田平教会での復活節第3主日は、皆さんも昨日のこのように覚えているでしょう。「中田神父は現在、薬を3種類服用しています」このセリフを言えば、あーそうだったと思い出してくれるでしょう。もう7年も前の話なので許してくれると信じておりますが、説教を準備し始めたのは赴任する2ヶ月前からでした。

今年、平戸地区も紐差教会で司祭の異動があり、私より10歳若い鶴崎神父様が着任しました。地区の司祭団で紐差教会に行って出迎えてきました。平均年齢が若くなります。着任早々、司祭館建設の事業が待ち構えています。大変だとは思いますが、きっとやり遂げてくれるでしょう。今日、ミサの説教ではどんなことを話しているのでしょうか。

福音の学びに移りましょう。前半は、不思議な大漁の物語です。ヨハネ福音書6章の五千人の人にパンを食べさせる奇跡と重ねて考えると良いと思います。どちらの場合も、弟子たちは必要な食べ物を準備できませんでしたが、イエスがそれを準備してくださいました。

ヨハネはこの様子、つまり「必要な食べ物を用意できないでいたときに、自分たちに代わって用意してくれた」その様子を見てペトロに、「主だ」と言ったのでした。もう少し踏み込んで考えると、背景に旧約時代からの信仰があるかも知れません。

福音記者ヨハネは旧約聖書に明るい人物でした。創世記22章を思い出したはずですが。アブラハムはイサクをささげるよう神に命じられます。最終的に木の茂みに角をとられていた雄羊を捕まえ、イサクの代わりに

ささげ、その場所を「ヤーウェ・イルエ」（主は備えてくださる）と名付けました。この出来事と不思議な大漁が重なったことでしょう。

次に、今週の朗読の後半部分は、イエスとペトロの深い信頼関係が見えます。ペトロは、イエスが三度目も「わたしを愛しているか」と言われたので悲しくなるとありますが、それでも互いの信頼関係は壊れません。イエスがペトロに「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」（マルコ 8・33）と言ったときでさえ、互いの信頼関係が傷つくことはなかったのです。

一つ疑問に思うのは、ペトロは本当にイエスから三度「わたしを愛しているか」と言われるまで何も考えなかったのだろうか、ということです。中田神父が同じ立場だったら、三度目には「あ、これは何かを気付かせようとしているのだな」と考えますね。ペトロは正真正銘、真っ直ぐな人だったのだと思います。

「悲しくなった」文字通りに取れば「理解してもらっていないのだろうか」と感じたわけですから、よほど正直な人だったのでしょう。私であれば、イエスが気付かせようとしているのはどの出来事だろうか、あれこれ考えたことでしょう。イエスの最期の場面で三度「知らない」と言ったことを思い出させようとしているのだろうか。

あるいはマタイ 18章 22節「あなたに言うておく。七回どころか七十倍までも赦しなさい」あの言葉を思い出させて、イエスから何度「愛しているか」と問われても「愛しています」と答えることを求めておられるのだろうか。いろいろ考えるでしょう。

案外、そのどれも違うのかも知れません。あらゆることをペトロに考えさせて、考えたことのさらにその先、考えたことをすべて横に置いて、「わたしを愛しているか」とお尋ねなのかも知れません。

「わたしを愛しているか。」私はどう答えるのでしょうか。「はい」と答えると思いますが、期待に応えることなどできないことは分かりきっています。それでも「はい」と答え続けること。イエスはきっと、その覚悟をお求めなのです。



復活節第4主日 (ヨハネ 10:27-30)

そこに「永遠の神に触れる体験」はあるんか

直径 20cm のフライパンを買いました。「鉄厚板フライパン」で検索して、いちばん安いのを買いました。同じ直径で高い物は 6000 円からありましたが、2420 円を 32%引きで 1652 円でした。「鉄厚板」で探してヒットしたものには 1.6mm のものもあったのですが、私が選んだのは 2.3mm の厚さと書かれていました。3.0mm という聞いたこともない厚さのものもありましたが、アルミ製でしたので買いませんでした。

これで何を作るか。全然興味ないとは思いますが、オムレツを作るためです。店で食べると結構な値段がします。それなら練習して、自分で作って食べようという気になりました。一パック 222 円の卵も三パック買ひまして、すでに四回挑戦し、昨日はまあまあのできあがりでした。三パック使い切った頃には「司祭館食堂」を開いて、「生涯忘れないほどのオムレツに触れる体験」を提供できるかも知れません。

「わたしは彼らに永遠の命を与える。」(10・28) 今週の説教はこのイエスの約束を説明することに費やしたいと思います。羊に例えられている人々は、イエスを信じ、イエスに全面的に従おうとする人々です。この人々に、イエスはほかの誰も与えることのできないもの、「永遠の命」を与えてくださいます。

まず、「永遠の命」とは何かを考えてみましょう。「これ」と指し示すことができるものではなさそうです。私が考えてみたのは、「永遠である神に触れる体験」と言ったら良いのかなと思いました。ほかの言い方をすると、「生涯忘れないほどの、神に触れる体験」と言っても良いでしょう。

「永遠である神に触れる体験」「生涯忘れないほどの、神に触れる体験」そう言って、「ああなるほど」と言う人はそんなに多くはないでしょう。それよりも、実際の体験を紹介したほうが分かりやすいと思います。私にとって、生涯忘れないほどの神に触れる体験になったのは、中学生の時に聞いた二十六聖人のミサ説教でした。

「あなたがたは何を見に、ここに集まったのか。預言者か。そうだ。言うておく。預言者以上の者である。」2月5日の寒空の中、神学生だったのでしかたなくミサに参加していた私に、ミサの説教は心を打ちました。司祭になったら、生涯、今日の神父様のように心に残る説教をしたいと思ったものです。

その当時は、説教中も下を向いていたので説教師がどなただったのか知らなかったのですが、司祭になり、浦上教会に助任で配属され、司祭館で「司祭になろうと決心した出来事を何か一つ皆で分かち合おう」となった時に初めて知ったのです。主任司祭の川添神父様が「その説教をしたのは私だ。よく司祭になってくれた」と言ってくれました。

一方の川添神父様は、8月9日の原爆の体験を話してくれました。当時長崎商業の学生だった神父様は、動員がかかって学校に集まる予定

でしたが行きませんでした。11時2分、原子爆弾が投下され、長崎の町が一瞬で燃えてしまったのです。すべてを失い、長崎商業で学業を続ける意味も失ったときに声を掛けてくれたのが、当時大浦教会におられた浜口庄八神父様でした。

「失う物がもう何もないなら、神学校に行かないか。」そう勧めてもらったおかげで、川添師はすべてを失った後でも決して失われない生き方があると考え、司祭になられたのだそうです。不思議な縁で、「永遠である神に触れる体験」をされた神父様が西坂でなさった説教を通して、私も「生涯忘れないほどの、神に触れる体験」をしたのでした。

「わたしは彼らに永遠の命を与える。」永遠の命を与えてくださる復活したイエスは、今も生きておられます。あなたが、カトリックの信仰をいただいたことを「永遠に続く恵み」と感じさせてくれる体験を、復活の主は用意してくださり、与えてくださいます。

今すぐにでも分かち合える体験を持っている人もいるでしょう。そうでない人も、「わたしは彼らに永遠の命を与える」と言われるイエスに信頼し、いつか体験できるよう願い続けましょう。私も、洗礼を受けたすべての人が永遠である神に触れる体験を味わうその日まで、祈り続けたいと思います。

復活節第5主日(ヨハネ 13:31-33a,34-35)



復活節第 5 主日 (ヨハネ 13:31-33a,34-35)

人は互いに愛し合い、神に栄光を帰すことができる

13章35節「互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」今週はここに目を向けてみましょう。

そのために順を追って考えてみたいのですが、前半は御父と御子の間で交わされる「栄光」についてです。ちなみにここで用いられているギリシア語 *δοξα*、日本語で「栄光を受ける」「栄光を与える」と訳されていますが、これは名詞 *δοξα*「栄光」から派生した動詞なのだそうです。日本語には対応する動詞がありません。日本語翻訳がいかに苦勞するか、こんなところにも現れていると思います。

さて御父と御子の間で交わされる「栄光」は、神と人間の間では交わすことができません。仮に「神」が「人間」に栄光を与えたとしても、「人間」は「神」に栄光を与えることができないからです。ですから御父から御子が栄光を受け、御子から御父が栄光を受ける姿は、神と人間の間で、また人間同士の間で実現できない姿です。

それでもなお、イエスの弟子たちは、イエスの模範を互いに表現することで、イエスの弟子であることを皆に知らせなければなりません。「あなたがたは何者か」と問われたときに、この世の物差しで何をどれだけ持っているか、何をどれだけ成し遂げたかで説明するのではなく、イエスの弟子であることを証明して何者であるかを知らせなければなりません。この世の物差しで計るなら、イエスの弟子でない人のほうが、はるかに大きな持ち物があり、大きな働きを成し遂げていることでしょう。

「あなたがたは何者か」と問われたとき、最も偉大な答えは何でしょうか。それは「キリスト者である私たちは、イエスの模範に倣って、互いに愛し合う者です」という答えです。年老いた人も若者も、男性も女性も、イエスに倣って互いに愛し合う人であることが、この世で最も偉大な生き方をしている人なのです。

私たちは栄光を与え合うことはできません。しかしイエスが私たちを愛してくださったので、互いに愛し合うことでイエスに倣う者となることができます。イエスに倣う者はイエスの弟子です。御父と御子の間では栄光が交わされます。キリスト者である私たちの間では愛が交わされ、御父と御子に似る者となるのです。互いに愛し合う姿を見れば、すべての人がイエスを知ることになります。これ以上の大きな働きはありません。

私たちキリスト者は、互いに愛し合う必要があります。自分のことをいったん横に置いて手を差し伸べたり、人を自分のように思っ必要なお世話をしたり、日々何度も赦したりすること。こうして私たちは互いに愛し合います。土曜日の朝ミサで話したことを付け加えるなら、「友のために自分の命を捨てること」、言い換えるなら自分にとってどうし

でも譲れない順番にあるものを、二番目三番目に下げて協力することも、愛することです。

私たちキリスト者が互いに愛し合うことで、最終的に表せるものは何でしょうか？意外に思われるかも知れませんが、神に栄光を帰すことだと思います。私たちが唯一、神に栄光を帰すことができるのは、互いに愛し合うことではないでしょうか。私と正反対の相手、「憎い」と思っている相手にも愛を与えるなら、私は神に栄光を帰すことができます。

私たちが互いに愛し合うなら、この世のすべての人が、私たちを通してイエス・キリストを知ることができます。こうして私たちは互いに愛し合う相手をさらに増やし、神に栄光を帰すことができます。

復活節第6主日(ヨハネ 14:23-29)



復活節第 6 主日 (ヨハネ 14:23-29)

聖霊の力、聖霊の賜物はたいしたものです

今年、小学生中学生の黙想会を 7 月 18 日「海の日」に計画しています。あまり長くとどまらせると三密になりますので、午前中で切り上げようと思っています。

少し難しい話かも知れませんが、「福者カミロ・コンスタンツォ神父様の殉教 400 年」について話してみたいと思っています。今年はちょうど殉教 400 年に当たっています。

カミロ神父様には申し訳ないのですが、私はカミロ神父様を材料に二時間も三時間も話すことはできないので、他のことも考えています。その一つが、「聖書の書名数え歌」です。旧約聖書、新約聖書、ともに数え歌の準備ができたので、中学生は丸暗記、小学校高学年は新約聖書を覚えてもらえたらと願っています（ここで実演）。

さて小学校低学年は、暗記させるのはちょっと酷なので、思い出だけでも残してあげたいです。「あー、なんか集まって、『せーんろはつづくよ』って歌ったことがあるなあ」くらいで大丈夫です。というのは、今週イエスがこう言っています。

「しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」(14・26) 今教会が保ち続けていることは、広く言えばイエスが話してくれたことです。きっとすべてのことを教え、思い起こさせてくれる。わたしはそう信じて、小さい子供たちにも数え歌を教えようと思います。

黙想会で取り扱う三つ目は、新しい「ミサの式次第と奉献文」の変更箇所をお勉強したいと思っています。いよいよ今年の待降節から、「ミサの式次第と奉献文」は新しく用意されたものを使いますから、子供たちには早めに体験させてあげようと思っています。

「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」イエスから弟子たちに伝えられ、弟子たちから私たちに伝えられたことは、堅信式を受ける準備の学年になるとかなり掘り下げて教え込まれます。しかし、どれだけの人が、習ったその時点で内容を理解できていたのでしょうか？

その時点で理解できていなかった人がきっと多いはずです。その後も理解できないままなのではないでしょうか？ そうではありません。今でしたら、覚えたことが理解できて役に立っているはず。あるいは久しぶりに読み返すと、よく理解できるようになっていることでしょう。

聖霊の力、聖霊の賜物はたいしたものです。私たちが理解できないままでいたことを解き明かしてください。子供たち孫たちに、習い覚えたことを解き明かす力を与えてください。

来週は主の昇天、再来週は聖霊降臨です。これからの二週間、あらためて聖霊の賜物を祈り求めましょう。



聖霊降臨の主日 (ヨハネ 14:15-16,23b-26)

空気が抜けるビーチボールは外からのパッチが必要

聖霊降臨の主日を迎えました。クイズです。先週「主の昇天」を祝いましたね。「主の昇天」はなぜ、「主の昇天の主日」と言わないのでしょうか？また来週は「三位一体の主日」で、再来週は「キリストの聖体」です。「キリストの聖体の主日」とは言いません。なぜでしょう？

さて、聖霊降臨の出来事を、例えを使って考えてみたいのです。私が部屋の片付けをしていて見つけたビーチボールを材料にしたいと思います。いつ購入したかも覚えていないのですが、世界地図をあしらったビーチボールでして、楽しみながら世界地図を覚えられる優れたものです。

しかしいざ空気を入れて膨らませてみると、残念な結果になってしまいました。いくら空気を入れても、時間が経つとしぼんでしまうのです。自転車や車のタイヤチューブで、どこかに穴が開いていて、何度空気を入れてもしぼんでしまう経験がおありでしょう。車は簡単ではありませんが、自転車はちょっとした道具とコツを覚えれば外からパッチを当てて修理することができます。

先ほどの地球儀のビーチボールに戻りますが、いくら空気を入れても、どこかに穴が開いていればそこから空気が漏れ、しぼんでしまいます。目には見えない小さな穴であっても、外から塞ぐ、覆わなければ空気は満たされないのです。

これは、聖霊降臨の出来事をうまく表していないでしょうか。弟子たちは聖霊を注がれるまで、家の中にいました。閉じこもっていたと言ってもよいかも知れません。イエスは弟子たちに、「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」(マルコ 16・15)と命じられていたはずですが、自分たちの力だけでは実現できませんでした。力を蓄えようとしても、どこかで漏れて、しぼんでしまっていたのです。人間の弱さが、見えない小さな穴となっていたのでしょ。

この状態では、いくら努力で満たそうとしてもダメで、外からの助け(パッチ)がなければ満ちることはできません。この外からの助けこそが、約束された聖霊だったのです。聖霊は私たちに宣教する力を満ちあふれさせるパッチ、外からの助けだったわけです。

もちろん人間の努力も無力ではありませんが、人間はどこかに弱さがあるので、努力だけで宣教する人になろうとしても、それはいつになっても使えないビーチボールのままなのです。宣教を恐れて閉じこもっている弟子を宣教へと促したのは、ほかでもない聖霊だったのです。

私たちは皆、信じている信仰を宣教しなければなりません。しかし弱さがあります。その弱さは努力で乗り越えるものではなく、聖霊によって赦され、包まれて力を発揮する個性となるのです。

引っ込み思案、口下手、せっかち、おっちょこちょい等。いろんな欠けている部分を聖霊は穴を塞ぐパッチになってくださり、一人一人の個性に変えてくださるのです。聖霊の照らしをミサの中で願い、私も信仰を伝える者とならせてくださいますと願うことにしましょう。



三位一体の主日 (ヨハネ 16:12-15)

神はご自身を五感で感じられるようにしてくださった

ここ数年、三位一体の主日に、「御父・御子・聖霊」をそれぞれ黙想するような説教をしてきました。去年は全体的な話で、一去年は「御父」について話していたようですので、今年は「御子」について話してみたいと思います。

私は二十年くらい読書に支障をきたす人たちを支えるボランティアグループの一つ「声の奉仕会マリア文庫」にお手伝いしています。その関係で日本国内のカトリックの声の奉仕グループ間でも録音によるお便りでやり取りをします。すると、会ったことがなくても「長崎で声の奉仕をしている神父さん」という形で、あちこちで知られています。

伊王島の馬込教会でのことです。私を訪ねてきた人がいたので島の中を案内していました。伊王島灯台をはじめ、いくつ回りながら案内していたのです。案内しながら歩道を進んでいると、私たちのほうにやって来る別のグループの一人が、「あっ！マリア文庫の中田神父さんですね？」と声をかけてきました。

何のことか分からず、近づいてその方に聞いてみると、視力に障害のある方でした。県外からたまたま長崎を訪れて、伊王島にはマリア文庫の録音の便りで声を寄せてくれる中田神父がいるから訪ねてみようということになり、伊王島まで来ていたそうです。

私は、近づいてくるかたが誰なのか知ることは出来ません。しかしその方は私の声によって、ふだん録音物を通して親しみを持っていた中田神父が自分の前に立っていると気付いたのです。「目の前に」と言いたいところですが、「目の前」は適切ではないかも知れません。

この時、ある人には「見える姿」がその人が誰であることを確かめる決め手になりますが、ある人には「声」が、その人が誰であることを確かめる決め手なのだ和理解したのです。その人は背格好とか、身なりで私を確認できできませんでした。声が捜し当てる拠り所となったのです。

三位一体は、御父と御子と聖霊が唯一の神であることを教えるものです。先ほどの私の体験と重ねると、御子は「声」と言えるかも知れません。その姿を見ることができなくても、声が間違いなくその方だと教えてくれる。そういうことではないでしょうか。

「声」は、それだけが存在するわけではありません。声を発するかたがいます。声を発するかたと声は、お一人のかたを表しているでしょう。姿形を捉えられない父である神が、御子を「声」として送ってくださった。三位一体の御子の働きは、そういうことではないかと考えたのです。

三位一体の神の働きについて、何か一つでも人に伝えるきっかけがあれば。中田神父はそう思って、この主日を迎えています。キリスト教の教えは説明がとても難しいものが多々ありますが、その中でも極めつけ難い三位一体の神秘を、私たちが味わい、信じ続けることができるように、恵みを願いましょう。今回のたとえば、皆さんの信仰理解の一助となりますように。



キリストの聖体 (ルカ 9:11b-17)

生活全体がキリストの愛に養われているか

先週、主日のミサが三回ありまして、繰り上げミサと6時のミサで「主の昇天」と「キリストの聖体」はなぜ「主日」とタイトルにつかないのか？という説明を、間違っていました。

この二つの祭日は、伝統的に木曜日に祝われていました。それを日本の教会は、木曜日では集まれない人が多いので、日曜日に振り替えている。この点を説明しなければなりません。申し訳ありません。この説明を、長崎で行われた「教区司祭黙想会」で思い知らされました。

黙想会木曜日のことです。午後の講話で福岡教区のアベイヤ司教様がこう切り出しました。「ローマでは本日、キリストの聖体が祝われています。私たちもその雰囲気を始めましょう。」ローマでは木曜日に祝われ続けている。私は間違った説明をしたことを思い出し、本当に恥ずかしい気持ちになりました。

キリストの聖体の祭日、本日午後5時から聖体賛美式もありますので、アベイヤ司教様の講話を参考に説教を進めていきたいと思えます。四日間の黙想会全体に言えることですが、司教様の講話はとても力強く、生き生きとしていました。基本を押さえながら、司祭たちが何かに気付く、そのためのお手伝いをしてくださったと思えます。

ミサは「記念」と言われます。最後の晩さんの記念です。キリストが残された愛の記念です。記念するのですが、記念を行うことで、私たちが「キリストの記念」となる。講話はここから始まりました。

「ありがたいものを託されたので、記念し続けます。」それだけではなく、私たち自身が「キリストの記念」になっていく。そこまで聖体の秘跡は私たちを招いている。なかなかその考えまで思い至りません。やはり、適切な指導を受けて黙想することは大切だと思った次第です。

ほかにもいろいろ考えるヒントを頂きました。それについては午後の聖体賛美式の祈りで紹介しますので、その時に味わいましょう。ここではもう一つだけ、キリストの聖体が信じる人にとってどれだけ支えになっているかを紹介して終わりたいと思えます。

アベイヤ司教様は教皇フランシスコからまず大阪大司教区の補佐司教として、酒井補佐司教様と一緒に司教に任命されました。その後福岡の司教に任命されたのですが、司教になる前はご自分が所属しているクラレチアン会の総長として、ローマで十年間務めていました。

その間は全世界七十カ国に派遣されている会員を回って励ましたりしましたが、極寒の地シベリアの会員を訪ねた際に、会員が「総長様、隣の小教区を訪ねてください。そこは派遣されていた会員の司祭が亡くなってから56年間ミサが行われていません。ぜひ行って、56年ぶりにミサをささげてください。」シベリア鉄道で4時間の場所でした。

考えられるでしょうか？56年前にミサが途絶えたまま、ずっと司祭なしで信仰を守り続けていました。そしてたくさんの方が、56年ぶりの

ミサにあずかってくれたのです。聖体の秘跡は、人々を生かすために与え尽くされたイエスの命です。その愛の秘跡をいただくミサを、56年待っていてくれたのです。

私たちも考えなければなりません。私たちはどれくらいミサを真剣に受けとめているのでしょうか。コロナ禍でミサが途絶えて再開した時に「ああ、またミサにあずかることができる」と喜んだはずです。私たちは1ヶ月とか2ヶ月待ったわけですが、お話に登場した人々は56年待ちました。これは、一つひとつのミサを、司祭はより真剣にささげ、みなさんはより真剣に参加する。そのきっかけになるのではないのでしょうか。

ご苦労だとは思いますが、もう一度、夕方5時に、聖体賛美式においで下さい。私たちの救いのために、惜しまず与え尽くした愛の記念を、もう一度賛美しに来てください。今日の聖体賛美式が、聖体の秘跡と生活の繋がりを深めるきっかけになりますように。

年間第13主日(ルカ 9:51-62)

年間第 13 主日 (ルカ 9:51-62)

鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は



年間第 13 主日、今週から 11 月 20 日まで忠実に「年間の主日」が続いていきます。11 月 13 日に年間第 33 主日を迎えると、次は「王であるキリストの祭日」つまり年間の最後の主日を迎え、今年の典礼暦を終えます。そして 11 月 27 日からは新しい典礼暦 A 年になり、この日から「新しいミサの式次第と第一奉献文から第四奉献文」に沿ってミサをささげることになります。11 月 27 日からは、司祭が「主は皆さんとともに」と呼びかけたら、皆さんは「またあなたとともに」と答えます。

次の典礼暦まではまだ時間があるので、目の前の典礼に集中することにしましょう。今週の福音朗読箇所の後半は「弟子の覚悟」が語られています。説教の準備をしながら、懐かしいことを思い出しました。高校三年生の時です。書道の時間がありました。真面目に取り組んだ生徒は、どんどん上達して、日本習字の創立者原田観峰先生から初段とか認定される人がいました。

中田神父はあまり興味が無く、真面目に取り組まなかったもので、ちっとも進級しませんでした。それはどうでも良いのですが、この習字の授業の最後に、女性の先生が「好きな言葉を提出してください。先生が色紙にしたためてみんなに渡します」という課題を出しました。

課題を出したその場で好きな言葉を提出したのか次の週だったかははっきり覚えていませんが、今週の朗読の結び、9 章 62 節の「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」を提出したのです。しかも、この節の前半だけ「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は」ここだけを提出したのです。それには訳がありました。

というのは、たぶん習字の先生は、私が提出した聖書の引用を知らないはずですが、さらに、弟子になりたいと申し出た人にイエスがかけた言葉で、「険しい道になるけれども、それでもついてきますか？」という弟子の覚悟を問う言葉であることもおそらく知らないでしょう。

そうすると、この言葉を色紙に書いて欲しいと願った高校三年生が何を考えているのか想像するかも知れない。もし、特に気にも掛けない先生だったら、「『鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は』何だろう？変な言葉を書かせる生徒だなあ」それくらいの反応でしょう。

しかし、この先生がもっと興味を持って、「この生徒が提出した言葉は、どこから引用した言葉だろうか。誰に聞けば分かるだろうか。職員室の先生方に聞けば分かるだろうか？」相当考えを巡らせて、これが聖書からの引用で、弟子になろうとしている高校三年生が、「道は険しいよ」ということを時々自分に言い聞かせるために書いてもらいたいと願ったのだと、そこまで考えてくれたなあと思いつつ、ルカ 9 章 63 節を、全体でなくそのさわりだけ、色紙にしたためてもらったのです。

そして何と、高校三年生当時のことと、今年の司祭黙想会の説教師の言葉が重なりました。ヨゼフ・アベイヤ司教様は、これからの福音宣

教に一つの方向性を示してくれました。これからの福音宣教は、「ともに歩むこと」「その人に寄り添うこと」から始めるべきではないか、ということです。少し前置きが必要ですが、これまで私たちの福音宣教は、「私たちの所に真理がありますから、私たちの所においでなさい」というスタイルでした。しかし現代人の多くは、「いいえ、真理はインターネットで自分で探しますから結構です」と考えているわけです。

教会に真理があるかも知れない。けれども、教会まで行かなくても真理を手に入れることができる。だったら教会に行ったり、洗礼を受ける必要は無い。そういうスタンスの人々に、「教会に真理があるから来るべきだ。教会に来ない人は真理に背を向けている」といくら声を上げても人々に響かないわけです。

むしろ、真理を探し求めている人、答えを必要としている人にぴったりの「問い」を、教会から投げかけ、その人とともに歩む。こういう方向で宣教の一步が始まるのではないか。アベイヤ司教様の宣教に対する考えをそう理解しました。

ここまで話すと、「そこで繋がるのね」と理解した人もいるでしょう。私は高校三年生の時に、書道を教えてくれた先生に、習う側でありながら「問い」を投げかけていたのです。先生は私の問いをどう受けとめますか。その後先生とお目にかかっているないので、結果は分かりません。良い答えを見つけてくれていたらと願っています。

私たちも、真理を探し求めている人、答えを必要としている人と日々出会っていると思います。イエスは「わたしに従いなさい」と呼びかけますが、私たちは真理そのものではないので、答えを必要としている人とともに歩んであげべきです。

ルカ福音書の最後の物語を皆さんもご存知でしょう。復活したイエスがエマオで現れる物語です。復活したイエス、真理そのものであるイエスがすぐそこにいるのに気付かず、復活したイエスは辛抱強く二人の弟子とともに歩き、聖書をひもとき、パンを裂いて与えてくれました。私たちにも、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は」と呼びかける機会がそこかしこにあるのではないかと思います。



年間第 14 主日 (ルカ 10:1-12,17-20)

あともう少しをつなぐあなたの手伝いが必要

今週の福音朗読は、イエスが十二人の弟子のほかに七十二人を任命して、御自分が行くつもりすべての町や村に先に遣わされたという内容で、「七十二人を派遣する」という見出しが付けられています。七十二人は、私たち皆に当てはまると考えています。

「七十二人も必要なのか」と考えるかも知れません。私は全世界で「すべての町や村」に宣教で出かけていく協力者としては七十二人でも足りないくらいだと思っています。そのことを考えるきっかけに、一つの例を紹介します。

かつて、上五島と佐世保を結ぶ九州商船のフェリーは、佐世保を出港すると上五島のいくつもの港に寄港していました。記憶が正しければ、佐世保を出港したフェリーが宇久島の港、小値賀島の港、それから有川港、立串港に寄港していました。現在は上五島内の連絡フェリーと佐世保有川直行便と分けて運航していると思うので、参考程度に聞いてください。

中田神父が中学生高校生だった時、小学生時分に出身教会鯛ノ浦教会の神父様だった「道向 栄」神父様が佐世保の鹿子前教会に転勤したので、私と私の先輩葛嶋神学生は、神学校の学期が終わると長崎からひとまず佐世保の鹿子前教会に立ち寄って、一泊させてもらった道向神父様に翌日佐世保のフェリー乗り場に連れて行ってもらい、上五島・鯛ノ浦に帰るといのが定番になっていました。

いつものように佐世保のフェリー乗り場に着きましたが、私は葛嶋先輩に「有川港直行ではなく、大回りして有川港に行く便に乗りたい」とお願いして、葛嶋先輩が乗った有川港直行を見送って、大回りをする便に乗りました。有川直行に乗れば、乗船時間が2時間半で、下船後私の家も葛嶋先輩の家も路線バスで15分程度でした。しかし大回りの便に乗れば、乗船時間が5時間必要でした。

なぜわざわざ大回りする便に乗ったのか？今考えると理解できませんが、当時は長い時間フェリーに乗ってみたかったのかもしれない。ひょっとすると、上五島にいながら、宇久島も小値賀島も見たことがなかったので、港周辺を見たかったのでしょうか。

フェリーに5時間乗り、港の景色も初めて眺めました。あともう一つ、珍しい光景を見ました。立串港でのことですが、この港は大きなフェリーを直接接岸させるには水深が浅い港でした。もしまともに接岸させようとすれば、フェリーでは乗り上げてしまいます。

そこで、立串港で下船する人のために、フェリーは波止場から少し離れたところで碇を降ろし、そこへ小舟がやって来て下船者を乗せ、立串港に連れて行ったのです。最後の何十メートルがフェリーでは近づけないので、その何十メートルのお世話を小舟がしたのでした。

あの時のことを久しぶりに思い出して、中田神父はこう思ったのです。最後の何十メートル、最後の最後のお世話、これが七十二人の宣教活動なのではないかと。田平小教区で言えば、それは地区の評議員でしょう。評議会で検討したことを、各家庭までの最後の何十メートル、あともう少し

のお世話があって、小教区は回っているのです。田平小教区だけではありません。偶然ですが長崎教区は七十二小教区に分かれています。七十二人だけではとても足りません。その何倍もの人に協力を頂くことで、すべての家庭、すべての信徒へのあと何メートルを繋ぐことができるのです。

最初のたとえで、佐世保港を出港したフェリーは上五島・立串港内までやって来ました。港内まで入って来たのだから、立串の集落までやって来たと言えないこともないでしょう。しかし地面に足を降ろすところまでは来ていません。その最後のお世話、あと少しのお世話をしてくれる小舟が、大切な役割を果たしたのです。

同じように、私たちも、「宣教する長崎教区」の使命がすべての人に届くように、あと少しの距離をつなぐのです。情報や、知らせたいことがそこまで来ているのに、あと少しのお手伝いがないために不自由している。教区の呼びかけ、福音宣教の実り、これらが手渡しできないでいる。そのあと少し、手が届きそうで届かない少しの距離を繋ぐために、より多くの人の奉仕を必要としているのです。

私もまた、その七十二人の中の一人ではないでしょうか。

年間第 15 主日(ルカ 10:25-37)



年間第 15 主日 (ルカ 10:25-37)

人を行動へと駆り立てる深い憐れみ

金曜日の安倍元総理大臣の死去のニュースには目を疑いました。すべての命に心を寄せておられる神様に信頼を寄せて、心からご冥福をお祈り申し上げます。どんな理由にせよ、暴力で人を黙らせ、社会を黙らせようとする行動は許されません。容疑者は、安倍元総理大臣に銃で二発発砲しました。

一発目は当たらず、二発目が命中して安倍氏は倒れたのだと思いますが、実は一発目はその場を通りがかって助けようとした善良なサマリア人イエスを撃って、助けられる命を助けられなくしたのだと思いました。

今日の福音朗読は、律法の専門家がイエスに問いかけました。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるのでしょうか。」イエスが「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は正しい答えを返したのです。イエスも「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる」と返しました。

これが一度目のチャンスでした。イエスと出会った律法の専門家が、永遠の命を受け継ぐにふさわしい生き方を開始する、最初のチャンスでした。しかし彼は、「自分を正当化しようとして」そのチャンスを無駄にしたのです。

律法の専門家にもう一度チャンスが巡ってきます。「さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」これにも正しい答えを返しました。「その人を助けた人です。」そして二度目のチャンス、もしかしたら最後のチャンスかも知れない場面でイエスは再び促します。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

この律法の専門家は、最後かも知れない二度目のチャンスを活かしたのでしょうか？その後のことは書かれていませんが、残念ながら二度目も活かせなかったのではないかと思います。「誰が自分の隣人か」にこだわり続けた結果、イエスが示そうとした「あなたは誰かの隣人になろうとしているか」に気付くことができなかつた。

ここからは中田神父の勝手な結びつけです。安倍氏に銃を向け、二発発砲した容疑者も、私たち人類の隣人になるためにおいでになったイエス・キリストに耳を傾けるチャンスを、二度とも失ってしまったのだと思います。一度目で、命の大切さに気付くことはできました。自分がしようとしていることは許されないことだと。許されないことだと分かっているのに、再び発砲して心の声に聞き従わなかつたのです。

誰かの隣人になろうとすることは時には難しいこともあります。心の声は「傷つけてはいけない」と自分に叫びを上げているのに、心の声に背を向け、暴言や暴力で相手を黙らせ、言いなりにしようとしみます。その人は、目の前にいる人を暴力で黙らせているだけではなくて、隣人になろうとしてくれているイエス・キリストをも、同時に黙らせ、傷つけ、痛めつけているのです。

私たちが誰かの隣人になるために、チャンスは一度かも知れません。もし二度チャンスが巡ってくるなら、手遅れになる前にそのチャンスを活かし、握りしめたものを手放しましょう。命に対する深い憐れみ、いつくしみこそ、誰かの隣人になるために必要なことです。

年間第 16 主日 (ルカ 10:38-42)

マリアは良い方を選んだ



司祭館西側に、今年もゴーヤを植えました。同じ場所に、オクラも植えました。「植えた」と言いましたが、私が植えるわけではないので、正確には「植えてもらいました」です。水やりは、いちおう私の仕事です。雨が降らないかなあ。

一つ学習しました。オクラの実は、まっすぐ育つのですね。葉っぱが茂って、見落としていたのですが、もう食べ頃を過ぎてから実に気付きました。その場かじってみたら、繊維が固くなっていて、いくつかはおいしく食べられませんでした。

ゴーヤはまあまあのタイミングで収穫できたので、下ごしらえして卵と合わせて炒め物にしておいしく食べています。小学生中学生の皆さんここでクイズです。ゴーヤの下ごしらえのために、縦半分に割って、中のわたを取り出しますが、このとき北斗神拳を使って取り出します。気合いを入れるとき、どんな声を出すか分かりますか？「わた！わた！」です。

まあ、今日の説教はこれで終わったようなものですが、ここから北斗神拳よりも「真剣に」福音のお話をします。イエス様がマルタとマリアの家に迎えられました。マルタは、おもてなしをしたかったので忙しく働きました。マリアはイエス様のそばにじっと座って、話に聞き入っていました。

マルタはおもてなしの手伝いをしないマリアを不満に思っています。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」(10・40)

けれどもイエス様の返事は意外でした。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」(10・41-42) イエス様の返事に、見落としてはいけない大切な言葉がありました。

気が付いたでしょうか。それは、「マリアは良い方を選んだ」という言葉です。「選んだ」と言っています。「何かと何かがあって、どちらか一つを取る」というのが「選ぶ」ということでしょうか。マリアは「何」と「何」を比べて選んだのでしょうか？

お父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんは気が付いていると思います。マルタのようにおもてなしをたくさんしてあげることと、イエス様のそばにいて、じっくり話を聞くことと、この二つを比べて、話をじっくり聞く方を選んだのです。

マルタはどうだったのでしょうか？マルタは選んでいないのかも知れませんが。「おもてなしをすること」この一つだけが頭に浮かんで、忙しく働いたのだと思います。「一つだけ」しか考えなかったら、「選ぶ」

ことはできません。これは私たちにも大切なことを教えてくれているのです。私たちもいくつか考えてみて、その中の良い方を選ぶことが大切なのです。

夏休みがもうすぐ始まります。思いっきり遊びたいでしょう。けれども「思いっきり遊ぶ」この一つだけしか浮かんでいない人は、選ぶことができなくなってしまうですね。もしかしたら、「思いっきり遊ぶ」この一つの考えに、縛られているのかも知れません。縛られている人は、自由な人ではなくて不自由な人です。

「思いっきり遊ぶこと」のほかに「時間割を決めて過ごすこと」も考えてみましょう。少なくとも二つ考えたなら、どちらかを選ぶことができます。両方を比べて、「良い方を選んだ」とき、あなたの夏休みはすばらしい夏休みになるでしょう。

こんなことを別に中田神父が言わなくても、お父さんお母さんが子供に言えば済むことです。むしろ中田神父が言っても、右から左に通るだけかも知れない。今日ここに集まった保護者の皆さんは、「マルタとマリアをごらん」と言って、「マリアは良い方を選んだよ。あなたはどうする？」と諭すことができます。立派な福音の伝達ができる機会を、みすみす逃さないでほしいと思います。

きっとすべてのことに、この教訓は活かせるでしょう。一つしか頭に浮かんでいない人は、「岐路に立たされている人」でさえありません。選択肢を持たずに、ただ一つのことに縛られている不自由な人です。イエスが「必要なことはただ一つだけである」と仰ったのはどんな意味でしょうか。「選ぶ」ということだったのでないでしょうか。

私たちは一つの考えだけに縛られてはいけません。イエスはたった一つのこと、「選ぶ」大切さを示されたではありませんか。もし、「これしか正解はない」と考えて行き詰まっているなら、イエスのそばにじっと座って、果たしてそれは自由に選んだ答えなのか、考えてみることです。主のもとに座って話に聞き入るなら、私たちもきっと「良い方を選ぶ」ことができるに違いありません。



年間第 17 主日 (ルカ 11:1-13)

求めなさい。探しなさい。門をたたきなさい。

田平教会は、小教区内の信徒の新型コロナウイルス陽性判定報告を受けて臨時の役員会を開き、年間第 17 主日と、年間第 17 週週日のミサを中止することにしました。ここ一週間の長崎県の感染状況を考えれば、誰が感染してもおかしくないし、感染対策を続ける中で感染したことを誰も責めることはできません。受けとめていきましょう。

さて福音朗読は、イエスが主の祈りを弟子に教える場面と、粘り強く祈り求めることが教えられています。このミサ動画を観てくださっている信心深い信徒にとって、今日イエスが教えてくださることは何も異存が無いかも知れません。しかし、お世辞にも信心深いと言えない中田神父にとっては、粘り強く祈ることを教え諭すのは後ろ指を指される思いがします。「信心深くないあなたに説教されたくない」と言われてもしかたがありません。

そんな中田神父ですが、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」(11・9) この体験が無いことありません。数少ない体験を通して、信心深い皆さんが今週の福音朗読を味わう助けになればと思います。

私の中で「一度でいいから体験してみたいこと」と言えば、司祭叙階式の日の教話ということになります。叙階の秘跡を受ける人と、集まった会衆に向けて、この日の心構えを語るお話です。たいていは、受階者の所属教会の主任司祭が引き受けます。

ですから赴任した教会に候補者がいることが大前提です。なかには巡り合わせが良くて、赴任した二つの教会で司祭叙階の対象となる助祭がいて、二回教話をおこなった後輩司祭もいます。ただ、「やりたいなあ」と言っている人が引き受けるよりも、「やりたくないなあ」と思っている人に大役が回った方が、誠実な話ができるのかも知れません。

仮に、私にその大役が回ってきたら、参考にしたいなあと思っている説教があります。それはイエズス会のジェームズ・バークレー神父様が実際の叙階式でなさった説教で、その日本語訳を大神学校の助祭の時に読んだことがあります。「弱さを身に負うがゆえに」(“Because beset by weakness”)というタイトルで、コリントの信徒への手紙二の「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」(二コリント 12・9) これがそのまま当てはまる説教です。

大変印象深い説教でした。そこで、大神学校の図書館の責任者であるカナダ人の神父様をお願いして、記事のコピーを取ってもらい、卒業してからも持ち歩いていたので。ところが数回の転勤で引っ越しをするうちに、大切な説教のコピーを失ってしまいました。その後大神学校に行っても図書館には足が遠のき、しばらく読み返すことができなくなっていたのです。

そんな時、願ってもないチャンスが回ってきました。今から 10 年ほど前です。私が代表を引き受けている視覚障害者へのボランティアグループの会員の一人が、純心大学の図書室で働いていました。そこで雑誌のことを尋ねると、その雑誌の該当するページをコピーすることができるので、久しぶりに記事を読み返すことができたのでした。

ここまででしたら、「それは良かったですね」で終わるのですが、話はこれで終わりません。新しい辞令を受けて、私は現在の田平教会に来ることになりました。恥ずかしい話ですが、まともや、叙階式ミサの説教原稿を失ってしまったのです。それでもずっと、心の隅に手に入れたいという思いがありました。そこへ、まともチャンスが巡ってきます。

田平教会は何人もの純心聖母会のシスターを輩出しています。その中の一人のシスターに、「記事を手に入れることはできるだろうか」と相談してみたのです。すると快く引き受けてくださり、近いうちにコピーして届けてくださることになりました。今度ばかりは失うことがないように、クラウドドライブに保管しておこうと思っています。

中田神父にとっての「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」このみことばは、三十年にわたる司祭生活のなかの一つの出来事で体験できました。長い時間がかかりましたが、「だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる」(11・10)この体験ができたのでした。

イエスの約束は、「だれでも」体験できる。これは信頼に値します。私はお世辞にも信心深いとは言えない神父ですが、そんな私でも、長年探し求めたものを手に入れることができました。これからも、求め、探し、門をたたくことで、イエスは信頼に値するお方ですと人々に証ししていきたいものです。

年間第 18 主日 (ルカ 12:13-21)

神のために豊かになる生き方の報い



「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」(12・20) イエスのたとえ話の結びを説明するために、今日の説教はあるわけですが、一人の司祭が伝えることのできる量は限られています。各自、自分にとってイエスのこの招きがどのように当てはまるのかを考えるなら、私たちは神の前に豊かになれると思います。

一週間、田平教会は公開ミサを中止しました。中田神父は次の日曜日、一週間ぶりにミサに参加できてよかったなと思えるようなミサと説教はどういうものだろうかと考えて過ごしました。そんな中、ミサが中止になってすぐ、長崎教区の司祭たちにとって誰もが恩人と言える人が亡くなりました。長崎でカトリックの葬儀社を立ち上げ、その会長を務めておられたパウロ西村勇夫さんです。皆さんの中にも新聞でお読みになった方がおられるかもしれません。

ほどなくして通夜と葬儀の日程が決まりました。24日(日)の夜7時に通夜、25日(月)午前11時から葬儀ミサでした。しかし長崎市内の新型コロナ感染状況を考えると、出席すべきか迷うところでした。考えた末に、弔電を打って、田平教会で同じ時間にミサをすることにしました。もちろん非公開のミサでしたが、心は浦上教会のミサに参加しているつもりでおささげしました。

弔電は、私が浦上教会助任時代にお世話になったことを思い出しながら、思いつくままに打ちました。「パウロ西村勇夫様のご訃報に接し、心から哀悼の意を表します。多くのカトリック信徒の天国への旅立ちをお手伝いしてくださり、感謝申し上げます。『これらの人々にしてくれたことは、わたしにしてくれたのである』とのイエスのことばを受け取る時が来しました。田平教会からミサの中で心を込めてお祈り申し上げます。カトリック田平教会中田輝次」

もっと、文面に込めるべき事柄があったかもしれませんが、関係各位の弔電が殺到しているでしょうし、どうせ読まれることもなかろうという安易な考えで、思った通りのことを申し上げたわけです。ところが私の弔電は、報告によると三番目に読み上げられたそうです。ビックリしました。

西村さんに届けたかった思いはこうです。彼は、カトリックの葬儀会社の代表として、教会葬儀のたびに、一切を横に置いて奉仕してくださいました。いつ何時葬儀の依頼が舞い込むかもしれず、常に緊張を強いられたはずです。まさに、「神のために豊かになる生き方」を仕事に選んだわけです。

ですので、その報いはマタイ福音書 25 章「すべての民族を裁く」にあるように、「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(25・40)これがふさわしいのではないかなと思ったのです。

「神のために豊かになる生き方」は、選ぼうと思えばだれでも選べる生き方だと思います。私は聖ヤコブのお祝いにと公式のミサのないこの機会に、早い時間から釣りに出かけた日がありました。まぐれで3キロ弱の鯛を釣り、刺身と兜煮を用意して届けました。仕掛けに食いついた瞬間に、豊神父様の顔が頭に浮かんだのです。私のことは二の次でした。これだけでも、「神のために豊かになる生き方」です。ちょっと考えればすぐ思いつくことから、生涯にわたっての生き方まで、いろいろ選べると思います。

ミサを中止した一週間、もしかしたら「自分のために富を積む生き方」だったかもしれません。それでも、もう一度ミサが再開してみたら、「神のために豊かになる生き方のほうが優れているなあ」と感じたのではないのでしょうか。皆さんにとって取り組めそうな「神のために豊かになる生き方」を見つけて、その道を究めることができますように。

年間第 19 主日(ルカ 12:32-48)



年間第 19 主日 (ルカ 12:32-48)

「通り過ぎる」はずが「そばに来て」世話してくださった

8月6日、広島原爆の日。8月9日、長崎原爆の日。多くの犠牲者、今も苦しみ悲しみを背負って生きておられる方のことを心に留めて、説教に務めたいと思います。私たちは平和な世界を決して諦めません。一人一人が平和のためにできることを、今週の福音の中で持ち帰りたいと思います。

生まれて初めて、ギックリ腰かな、という痛みに襲われました。座椅子に座っていて左を向いたときに、経験したことの無い痛みが腰に走ったのです。痛みは通り過ぎず、今もずっとそばにとどまっています。周りの皆さんに迷惑がかからないか心配しております。

福音朗読では、「目を覚ましている僕」という箇所が選ばれました。用意を怠らず、婚宴に招待されている主人が帰ってきて戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさいと勧めます。

この物語では、主人と僕の行動に注目する必要があります。時代背景を考えれば、主人にとって、僕は身分の低い存在です。婚宴の席から主人が帰ってきて、家の戸をたたいた時に僕に開けてもらったとしても、それをいちいち感謝したりねぎらったりする必要はありませんでした。

ここで主人が仮に、ねぎらいの言葉もなく僕のそばを通り過ぎたとしても、主人に特別難される点はありません。また僕が、主人に不平を漏らすべきでもありません。黙って通り過ぎるのがむしろ普通のことだったかもしれませぬ。しかしイエスは、この主人が僕の心がけを高く評価して、予想もできない形でねぎらってくれるだろうと言うのです。「はっきり言うておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。」(12・37)

当時の時代背景だけでなく、現在に至るまで、「主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましている」(12・38) そうであっても主人が僕に給仕してくれるということは考えられません。ねぎらいの言葉はあったとしても、ここまでのねぎらいは普通では考えられないことです。ではなぜ、イエスはこのような姿をたとえの中で語られたのでしょうか。この地上で考えられないとすれば、このようなたとえに意味があるのでしょいか。

この地上では、主人の帰りを常に目を覚まして待つ僕に特別な待遇が与えられなくても、天の国では同じとは限りませぬ。そうだとすれば、このたとえは天の国での報いを教えているのではないのでしょうか。通常であれば、通り過ぎるだけで終わる場面に、そばに来て給仕してくださる。この特別な出来事が天の国の姿なのです。

この姿を、地上で垣間見せてくれた場面があります。皆さん見当がつくでしょうか。最後の晩餐で、イエスが食事の途中で弟子たちの足を洗う場面です。地上では起こりえないこと、「先生」とか「師」とか呼ぶその方に、通常では考えられないもてなしをしてもらうこと。これは

イエスを通してすでにこの世で始まっているのです。

私は今週の福音朗読と、広島長崎の原爆投下の出来事を少し重ねてみました。原子爆弾を投下した兵士たちの行動は、上空を通過して爆弾を投下した、その一瞬の出来事です。投下された原子爆弾がさく裂したのも一瞬の出来事です。惨劇に巻き込まれた多くの人々は、自分のことで精いっぱい、誰が誰を見たとしても通り過ぎてしまったことでしょう。

しかしその中に、通り過ぎるだけで終わらず、そばに来て世話をくださる人々が少なからずいたのです。通り過ぎることなく、そばに来て給仕してくださった。そばに来て何かしら世話をくださった。自分以外誰も助けられなかった残酷なこの世の現実の中で、通り過ぎずに近寄って世話をします。そこに、神の国の出来事がすでに始まっていたわけです。

原子爆弾が投下された惨状の中、長崎では、永井隆さんや秋月辰一郎さんなどの医師が被爆者の治療に奔走したことが知られています。彼らに代表されるような勇気ある人々が、絶望の中にある人に近寄ってお世話をすることで、どんなに希望の持てない現実の中でも、神の国は始まっている。神は必ず、心ある人を使って出来事を一過性のものにせず、絶望の中に希望を与えてくださると証明してくださったのだと私は考えました。

どれだけ忠実に務めを果たしても、それでも当たり前のこととして通り過ぎてしまうことが多い世の中です。そんな中で、私たちは世の中を変える術を今週の福音朗読から読み取ることができます。この世では考えられないお世話をすれば、私たちは神の国の出来事をすでにこの世で始める者となるのです。

ルカ福音書第6章35節に次のような勧めがあります。「しかし、あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。」天の国は、敵を愛し、何も当てにしないで行動する人々からすでに始まっています。

年間第 20 主日 (ルカ 12:49-53)

硬く冷たい心を溶かす火を投じる



記録的な暑さと、記録的な新型コロナの感染者を日々体験している今年の夏です。この年間第 20 主日と次の聖母被昇天、手短に説教を終えたいと思います。かつて主任司祭であった川添猛神父様は 3 分で説教を終わった「猛者」ですが、そこまではいかなくとも、今日は早かったなあくらいにはしたいと思います。ひょっとしたら天国の川添神父様も、「お一、暑かせん、そいがよか」と言っておられるかもしれません。

私が子供の時、簡単な釣り道具は父親が作ってくれていました。アラカブ（カサゴ）釣りをするような釣り道具です。竿は切ってきて乾燥させた竹竿、道糸はヨマと呼ばれる漁師の網を修理するためのエンジ色の紐、ハリスはナイロン、針は何百本も袋に入った大きめの針でした。

これに一つ足りないのがオモリですが、父親は定置網で使用する鉛を少し切って、それを溶かして思い通りの形に整えて取り付けてくれました。それが釣り道具の基本でした。ただ父親は当時遠洋漁業でしたので、すぐ船に乗っていなくなります。そこからは一度だけ見た道具作りを、自分で再現する日々です。

竹竿、ヨマ、ハリス、針はあります。しかしオモリがありません。そこで父親がしていた通りに、定置網用の鉛を切って、缶詰の缶に入れ、台所のガスで溶かしてみました。鉛の融点は 327.5 度です。子供でも溶かすことができました。しかし思い通りに成形することができず、苦勞した記憶があります。

これは一つの例です。鉱物には、すべて融点があると思います。スズとか、溶けやすいものもありますが、多くのものは簡単には融けないでしょう。イエスは「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである」(12・49)と言われました。あらゆるものを溶かし、神の御望みの形に整えるために、イエスご自身が火を投じに来たのです。

その火は簡単に燃え移り、中から溶かしたかということそうではありませんでした。弱い立場にある人々には火が燃え移り、硬い心を和らげていきましたが、指導的立場にある人たちは冷淡な態度をとりました。子供のような心で受け入れることができず、火は燃え移りませんでした。そのため、苦しみと死を通して、ご自身を燃やし尽くされたのです。

私はかつて、信仰の火は投じれば簡単に燃え移るものだと思っていましたがそれは間違いでした。中には相当アルコールを注ぎ足さなければ燃えない人もいました。結局くすぶって燃えない人もいました。

心を溶かし、神様の望む生き方に人を導く。そういう司祭の完成形はまだはるか先です。けれども、私自身の命を差し出し、燃やしてでも、一人でも多くの人々の心を燃やして、神様の望む生き方を選ぶ信者に導いていく。それが、変わらない私の使命だと思っています。一人ひとりの心の融点まで、共に歩んであげたいと思っています。



聖母の被昇天 (ルカ 1:39-56)

被昇天は私たちが天に上げてもらう道の準備になった

聖母の被昇天を迎えました。神のメシアを送る計画は、救い主の母となるマリアに計画の始まりがあるのではなく、その準備の段階から始まっていました。メシアの到来の準備のために、神はエリサベトに働きかけ、時間をかけて前に進めることを望まれました。

神の計画、神の働きかけが、準備の段階から始まっているということを知るならば、私たちは神により深く信頼を寄せることができると思います。しばしばこの世で起こることは、準備の段階で関わった人と完成の段階で関わる人とが違ふことがあります。それでも、準備と完成の両方に神の働きかけがあると信じるなら慰めがあります。

聖母被昇天には、どのような神様の計画があるのでしょうか。マリアが天に挙げられた、それだけの計画だったのでしょうか。そうではないと思います。マリアのように、常に神に心を開いて生きる者が、必ず神のあわれみといつくしみにあずかる。その先駆けとして与えられた栄誉なのです。

神が、ご計画に準備の段階から関わってくださることを考えるなら、聖母の被昇天は何かの準備かもしれません。私は、聖母の被昇天がすべての人が天に上げてもらうための模範であり、準備だと思うのです。

マリアは、全生涯を神に心を開いて生きた人でした。人間的には受け入れるのが難しい出来事でも、神に心を開いてその意味が理解できる時を待ちました。神に心を開いて生き抜いたので、神から体も魂も天に上げられたのです。

これは神が私たちすべてに示された模範であり、準備でした。私たちが、マリアの模範に倣って神に心を開いて生きることを選ぶなら、私たちも天に上げてもらえるはずで。そして、マリアによって天に上げてもらう道が既に準備されているとしたら、私たちはより神を信頼できるようになるのではないのでしょうか。

神は準備の段階からご計画に関わっておられます。そして私たちは今からでも、神に心を開く生き方を考えることができます。先に子を宿したエリサベトにマリアが出かけて行ってお手伝いしたように、人の手伝いを買って出ること。神に心を開いたエリサベトとともに神をたたえたマリアのように、私たちも集まってともに神をたたえること。これらは、私たちが神によって天に上げてもらえる近道です。

マリアが、その道を先にたどってくださいました。神がマリアを通して、先に準備してくださいました。もし一つ、これに付け加えるなら、私たちより先に旅立った先祖のためにも、力を尽くしてあげましょう。私たちは今からでも生き方を選べますが、先祖はそれができないからです。日本の良い習慣に倣って、墓地で先祖とともに、集まって神をたたえるなら、天に上げてもらえるお手伝いをすることができます。聖母を通して私たちが天の栄光に上げてもらえる準備をしてくださった神に、今日心から感謝することにしましょう。



年間第 21 主日 (ルカ 13:22-30)

人はしばしば自分で戸口を狭いものにする

「お前たちがどこの者か知らない」(13・25) こう言われた経験があるでしょうか。経験がなければ、一度早めに経験しておいたほうがよいと思います。早めに経験していれば、取り返すチャンスがあります。

もし一度も経験せずに人生を終えたら、審判の日にこの言葉を聞かされるかもしれません。「御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです」(13・26)。最後の場面でこんな主張をしても、何の説得力もありません。生きている間に一度でも、この場面に立たされていたら、準備のしようもあっただけでしょう。

あるいはこう言い張ったとしましょう。「日曜日のミサに来ましたし、説教も聞きました。聖体拝領もしたのです。」しかし心の内も見通される神が、「お前たちがどこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ」(13・27) と言うとしたら、何を言っても無駄です。中身の無い、うわべだけの信仰では通用するはずがありません。

私は、司祭としての出発点で、「お前たちがどこの者か知らない」と言われた経験があります。その苦い経験が、私の司祭生活の薬になっています。大神学院の神学課三年生の時、老司教会に実習に出かけました。小学六年生の受け持ちで、堅信式を受ける学年でした。

一人、ものすごく手のかかる子供がいました。出席数が少なく、出席していても身が入らず、毎週この子供のことで頭を痛めていました。それでもようやく堅信式を受けるだけの準備ができて、私は堅信式の当日を迎える前に実習を終えて、私自身の助祭叙階の準備に入りました。

さらに助祭としての一年が過ぎて無事司祭となり、お礼参りの初ミサに老司教会に行ったのです。そこに立派な中学生になったあの子供がいました。仮に太郎君としましょう。懐かしさでいっぱい、毎週苦労させられたこともすっかり忘れて「おー太郎君。立派になったねえ」と声をかけた時でした。「すみません。神父様が誰か分かりません。」

心の中で叫んでいました。「冗談やろ～？お前のために俺がどれだけ頭を悩ませて、心配したと思っているの？」何と言いますか、司祭になって最初のショックが、最大のショックだったわけです。この時のことが今も薬となっていて、以来三十年が経ちましたが、何かの形で覚えてもらえる働きでなければ意味がないとつくづく思ったものです。

神は私たちに対して、義理立てすることなど何もありませんから、「お前たちがどこの者か知らない」と言うことも全く自由です。しかし、私たちの働きがうわべだけでなく報いを当てにしない真の奉仕であれば、何かを取り繕ったりせずとも、神は私たちを覚えてくださるでしょう。

前もって苦い思いをしておくことは役に立ちます。そこから残りの人生で、神に覚えてもらえる生き方に立て直していきましょう。今であればまだ十分時間があります。うわべだけでない真の信仰生活は、事情説明などしなくても神に覚えてもらえるからです。



年間第 22 主日 (ルカ 14:1,7-14)

末席に座ってあなたと食事を共にしたい

今週は都合により公開ミサを中止しております。ミサ中止は日曜日までですので、月曜日からは再開したいと思います。私の心の中では、よからぬ思いと本来のあるべき思いと両方があります。「よからぬ思い」とは、7月24日に公開ミサを止めて非公開のミサをささげ、それをYouTubeにアップしましたが、通常80回ほどの視聴回数が240回を超えていました。

一人で喜びたいなら、非公開のミサを選ぶでしょう。こんなにたくさんの方に観てもらえるのですから。しかし、一人でミサをささげる寂しさはたとえようありません。もちろん、参加できないすべての人と、心を合わせていますが、人間ですからそれを目で確認できないのは気持ちの入り方が違う気がします。

「招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。」(14・10)

「宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。」(同13) この箇所を読み返しながら、今回初めて、自分が浦上教会に赴任して間もない頃の出来事を思い出しました。

もう30年も前のことです。広い管轄区域の信徒と親睦を深めるため、宴会の席もしばしば開かれていました。司祭の霊名のお祝い会、敬老会、さまざまな機会に食事とお酒の席が設けられました。浦上に入って一年目、主任神父様と先輩の助任神父様たちはそれぞれ思い思いの席に出向いて、信徒の皆さんに飲み物を勧めていました。司祭に飲み物を注がれた信徒はきっと嬉しかったでしょう。

しかし私は、先輩たちのように気軽に信徒の席に飲み物を勧めに行くことができませんでした。まだ誰も、顔を覚えていない中で、お酌をしに行くのは私には不可能でした。それはそれはショックだったことを覚えています。会場は賑やかに盛り上がり、宴もたけなわなのに、私一人司祭の座る席から動くこともなく、茫然としていたからです。

あとで分かりました。先輩たちも新人の時に同じ思いをしたし、当てもなく注ぎに行っているのではなく、声をかけてもらえるのを待っている信徒に上手にお酌をしに行っていたのです。そうやって先輩も自分たちの姿を見せながら、私の巣立ちを促していたわけです。しかし私はなかなか巣立ちができませんでした。そこは本当に苦勞した点でした。

主任司祭に、または助任司祭に飲み物を注いでもらっただけで、信徒がどれだけ嬉しいか、今ならよく分かります。初めての主任司祭を経験した太田尾小教区で、お祝い会の席で民謡とかの出し物があると、よくスータン姿のまま飛び入りで混じったものでした。本来なら私が入ると調子を狂わせてしまうはずですが、いつも歓迎してもらい、会場は大盛り上がりでした。民謡を踊った後に一通り飲み物を注いで回ると、いろんな人からふだん聞けない話を聞くことができたのです。

「招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。」（14・10）
「宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。」（同 13）末席まで座りに行くと、この日の会場の様子が手に取るように分かります。様々な不自由を抱えている人に来てくれてありがとうと感謝を伝えると、会場全体が喜びで満たされます。

何かを当てにしているではありません。一人一人に、私はあなたのそばにいるよ。今日あなたが来てくれて嬉しいよと素直に伝えたい。そのためだけに末席まで行き、飲み物を注ぎ、すべての人と同じ食事を食べるのです。

もちろん、こんな経験を積み、生まれ変わったように社交的な人になれるかと言うとそうではありません。私は基本的には社交的ではない人間です。だからこそ分かるのです。末席まで出向いて座ることは、どんな知識や経験よりも人を納得させるということ。

初めに受けたショック。主任神父様も先輩助任神父様も末席に座って嬉々としているのに、自分は浦上教会の広い信徒会館で一人ぼっちになっている。そのショックが、末席に座る大切さ、お返しのできない人を招く大切さを痛いほど教えてくれました。

今は、コロナの時代でなかなか会食もままなりません。いちばん楽しかった時代が、もう一度やって来ることを心から願っています。末席に座ってお酒を酌み交わし、嬉々として宴会を楽しむ日が一日も早く来るように、「へりくだる者を高められる」主に願いましょう。



年間第 23 主日 (ルカ 14:25-33)

イエスを愛するために憎むべきものを憎んでいるか

「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」(14・33) 今日、私たち皆が、ここにたどり着けるようにと願いながら、説教を始めたいと思います。

実は最初に準備した説教が使えなくなったので、別の材料を使って焼き直して説教に臨んでいます。時間があまりなかったので、かなり焦りました。私たちはそれぞれ、自分なりの理想を持って生きていると思います。小神学校時代に、私は消灯時間が夜9時半と、あまりに早いの不満を持っていました。校長先生が濱崎渡神父様、副校長神父様が阿野武仁神父様で、なぜこの消灯時間なのか、説明を受けていないと思います。

しかし今なら分かります。小神学校時代は、「限られた時間の中でしなければならぬことをこなす」訓練の期間でした。その証拠に大神学校時代は、小神学校で受けた訓練のおかげで、限られた時間の中で果たすべき務めを果たせるようになりました。

そして司祭になると、小神学校時代の訓練がいかに大切だったかが分かります。司祭になると、自分のための時間を取れない場面がしばしば起こります。込み入った相談の電話、教会の台帳からの調査、命の危険にかかわる病人のために病院を訪ねるなどです。

それが土曜日に一度に重なっても、それでも主日のミサはやってきますし、説教を準備しなければなりません。特に田平教会は繰り上げミサがあります。さらにお葬式が土曜日に入ると、当てにしていた時間をすべて諦めなければならなくなります。

ここで、今週のイエスの招きを重ねて考えるのです。「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」小神学校時代の私は、「勉強したい人に思う存分勉強の時間を与えてくれればいいのに」という考えを捨てきれずにいたのです。「考え」も「持ち物」の一つです。この考えを捨てなければ、イエスの弟子ではありえないということです。

親子の間でも、この戒めは当てはまります。「子は親の言うことを聞いて当然だ」という考えを、ひょっとして握りしめ、捨てきれずにいるのではないのでしょうか。「子は親の言うことをすべて聞くのが当たり前」本当にそうでしょうか？その考えを親が捨てなければ、イエスの弟子ではありえないのです。

一方で子は親に対して理想を描いているでしょう。現実の親が理想とずれている、あるいはかけ離れていたら、親を拒絶すべきでしょうか。むしろ、子が親に対して持っている理想を横に置いて、現実の親の姿を直視し、受け止める必要があります。子が捨てなければならないのは、親に対して持っている「理想」です。

こうしてそれぞれが持ち物を捨ててこそ、イエスが示す十字架を担

えるようになります。何かを握りしめていたら、手は自由に使えず、十字架を担うことはできません。私たちが担うべき十字架を担うために、握りしめているものを憎み、手を自由に使えるようにしておくのです。

日本の教会は毎年9月を、「すべての命を守るための月間」と定めています。イエスがまず先に、人類に期待する理想像を「憎んで」捨て、人類のあるがままを「自分の十字架」として担い、「守り抜いた」方です。このイエスに導かれて、私たちもすべての命を守る生き方を特に今月目指していきましょう。命が守られていない状況が一日でも解消するように、祈りを付け加えることにしましょう。

年間第 24 主日(ルカ 15:1-32)



年間第 24 主日 (ルカ 15:1-32)

私たちは神に探し出されて連れ戻される小さな存在

「放蕩息子」のたとえが聖書と典礼に印刷されていませんので、今年も聖書と典礼に掲載されている、「見失った羊」のたとえと「無くした銀貨」のたとえに絞って考えてみたいと思います。

最近では皆さんの多くが、「携帯電話」「スマホ」を持っていると思います。携帯の置き場所を忘れて困ったことも一度や二度ではないでしょう。いよいよ置き場所を思い出せずに困ったら、皆さんはどうやって携帯の置き場所を探しますか？小学生中学生のお父さんお母さんはスマホの置き場所がわからなくなった時、どうやって探していますか？

おそらく、同じことをして探し当てていると思います。それは、「携帯電話に電話をかける」という方法です。ズバリでしょうか？幸いなことに、携帯電話に固定電話などから電話をかけると、着信音が鳴ったり振動したりして、自分の居場所を教えてくれるのです。

さて、福音朗読でたとえに出てくる「羊」や「銀貨」はどうでしょうか？残念ながら、これらは自分から「私はここにいますよ」と知らせしてくれません。100%、持ち主が探し当てない限り、戻ってくる可能性はないのです。携帯ならどこに置いたか思い出せないとき、音を鳴らすことができます。それとは比べ物にならない忍耐力をもって探さなければ、「羊」「銀貨」は見つけ出すことができないのです。

だから、喜びも特別なのです。お話の中では、「友達や近所の人々を呼び集めて」(15・6)「見失った羊」「無くした銀貨」のことを喜ぶのです。大げさに聞こえるかもしれませんが、見つけ出すまでの努力や忍耐が大きい分だけ、喜びも大きいのです。

ここまでの話をした上で、イエスはこう言います。「このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」(15・10) きっと道を外れた人というのは、自分から「私はここにいます。私を助けてください」と言えなくなっているのでしょうか。だからイエスが、道を外れるたびに苦労して探し回って神の国の交わりに連れ戻します。その苦労が大きければ大きいだけ、喜びも大きくなるのです。

今回朗読していませんが、「放蕩息子」のたとえに登場する弟も、遠い国で持ち物をすっかり使い果たして困り果てても、「お父さん私はここにおります」と声を出すことができませんでした。心を入れ替えて父の家に帰る時も、まだ遠くにいるうちから父親のほうが見つけて走り寄ったのです。ここでは見つけ出すまでの「忍耐」が大きかったので、喜びもひとしおだったのです。

私たちはどうでしょうか。私たちは「放蕩息子」でもないし、特に「罪人」というわけでもないのに「ここにおります」と言って悔い改める必要のない九十九匹の中にいるのでしょうか。私はそうは思いません。私たちもまた、「道を逸れて」声を出せないでいる一人なのです。

その証拠に、イエスはすべての人の罪のゆるしのために十字架にか

かりました。今月の日本の司教団の取り組みと重ねるなら、「すべてのいのちを守るために」イエスはいのちを差し出したのです。ですから私たちは、道を逸れるたびに神に向き直ることで、神の天使たちの間に喜びがあるのです。

ミサの中で「全能の神と、兄弟の皆さんに告白します。わたしは思い、ことば、行い、怠りによって、たびたび罪を犯しました」と唱えます。単なる儀礼として唱えている人もいるかもしれませんが、罪を犯して道を逸れていると謙虚に認めるなら、神が助けに来てくださるのです。

また、定期的にゆるしの秘跡を受ける人もいるでしょう。自力で神のもとに戻るができるのなら、秘跡のお世話になる必要などないはずです。ミサの中での告白も、ゆるしの秘跡の告白も、常に私たちを探し出そうとしておられる神の前に身を置くことなのです。

神は、途方もない努力と忍耐で、私たちを探し出し、ご自分の交わりの中に連れ戻してくださいます。その深い愛に感謝しましょう。神の深い愛を知ったのですから、私たちも周りの人に深い愛、忍耐を持つようにしましょう。今週一週間、「見失った羊」「無くした銀貨」の学びを告げ知らせる者となりましょう。

年間第 25 主日(ルカ 16:1-13)



年間第 25 主日 (ルカ 16:1-13)

神が天の国に場所を用意してくれるように、立ち回れ

何と言いましょうか、私たちが信仰を強めるために試練がどうしても必要なようです。福者カミロ・コンスタンツォ神父殉教 400 周年を記念する年に、台風がまともにやってきました。

私は二十六聖人の最後の日々が重なりました。西坂に向かう修道者・信徒たちは、最後にゆるしの秘跡をうけてから聖体を拝領することを希望したのですが、ある人には聖体拝領が認められ、ある人にはゆるしの秘跡だけが認められました。この世の最後の願いすら、取り上げられて殉教した人々のささげた犠牲が、祝いたくても祝えない今日の天気と重なりました。

「不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。」(16・9) 前もって「不正にまみれた富」を説明しておく必要がありますが、「この世の富」と同じ意味で使われていると考えてください。

「天の国の富」のことを思えば、「この世の富」は手段を択ばず蓄えたものかもしれませんし、不当な賃金で労働者を働かせて手にした財かもしれません。直接的ではなくても、安いものを選び、節約して貯めた富は、それまでに誰かが不当な賃金で働かされた結果かもしれません。

大なり小なり、この世の富は不正が混じっているのでしょう。この「不正にまみれた富」の部分を置き換えると「この世の富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。」となります。身近な友達を作るために、この世の富を手放します。

身近な友達だけでなく、見ず知らずの人も友達になってもらうためには、より多くこの世の富を手放す必要が出てくるでしょう。来週、世界難民移住移動者の日を迎えますが、世界中の見ず知らずの人と友達になるために、自分の持ち物を手放す日とも言えましょう。私たちがこの世の持ち物で世界中の難民移住移動者と友達になれば、すべてのいのちを守る一助となります。

今週の朗読は、冒頭に「そのとき、イエスは弟子たちに言われた」とあります。特に弟子たちに向けて言われたと考えるなら、現代にあっては司祭が一般信徒以上に、今週の招きと真剣に向き合う必要があります。朗読の後半、「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である」(16・10)とか「他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろうか」(16・12)とも言われています。

司祭一人ひとりが扱うのは、ごく小さな範囲かもしれません。しかしその小さな範囲を忠実に守り、大切にすることができなければ何も始まりません。第三助任司祭としてスタートした当初、任せられている内容は小さなものでした。けれどもそこで忠実さを発揮できなければ、第二助任、第一助任としてのもう少し大きな務めにも忠実さを発揮できな

いのです。

さらに、初めて主任司祭の辞令をいただいた教会は、たくさんの司祭が最初の主任司祭を経験する教会でした。それから、どの司祭たちも今では本人が戸惑うような規模の教会、歴史ある教会に赴任しています。小さなことに忠実さを発揮したので、のちに大きなことにも忠実さを発揮できたのです。

しかし、不忠実な僕に変貌する危険はいつもあります。年に一度だけ怠けたことが月に一度繰り返すようになり、しまいには毎週、毎日怠けることになる。一つの怠けがたくさんの怠け癖になる。どんな司祭にも起こりうることです。そこで身近なお手本を探すことにしました。

中田神父が住む田平で尊いお手本を探すなら、それは焼罪の殉教者で日本二百五福者殉教者の一人である福者カミロ・コンスタンツォ神父様だと思います。カミロ神父様は日本での宣教を熱望して入国しましたが、徳川幕府のキリシタン迫害のために追放されてしまいます。しかしカミロ神父様は追放の憂き目という小さな事にも忠実だったので、殉教という大きな事にも忠実を示したのです。

カミロ神父様は最初の宣教の時も、追放されてからも、神様への忠実が変わらなかったので、禁教令にもかかわらず日本に潜入して宣教し、最後の殉教の時までささげつくことができました。カミロ神父様はイエス様という主人と、徳川将軍という主人の両方に仕えることはしなかったのです。

徳川将軍は、自分の命令に従う人は命を保証しました。しかしイエス様は、すべての人に命の保証をします。カミロ神父様は、すべての人のいのちを守る方を主人として、イエス様の望みに小さな事にも、大きな事にも、忠実を示したのです。

誰しも小さな事には、すぐ怠りがちになるものです。しかし小さな事に忠実を示すうちに、人は相当な忍耐力を養います。それが、大きな事を成し遂げるための勇気につながるのではないのでしょうか。

神が、天の国に場所を用意してくださるように、小さな事には忍耐強く忠実を示し、大きな事には勇気をもって忠実を示して生きていきましょう。福者カミロ・コンスタンツォ神父様に取次ぎを願いましょう。



年間第 26 主日 (ルカ 16:19-31)

父よ、ではお願いです

今週は「金持ちとラザロ」のたとえです。亡くなった後の話を中心になりますが、私たちと結びつけるなら、待降節までのあと二ヶ月の間に、私の生き方は神の望みに叶っていてラザロのように扱ってもらえるだろうか、そうではなく、金持ちと言われる人のように、後悔が残るのではないだろうか。これらのことを考える材料になりそうです。

私は寝ていると夢を見ている日が多いです。何せ世界史の授業中に寝ていて、いい場面の夢を見ているときに山中寛先生から頭をひどくたたかれたことがあるくらいです。寝言は言わないほうだと思っていたのですが、どうやらそうでもなさそうです。

地区の司祭たちで泊りがけの忘年会に行った時のことです。当時 30 代だったでしょうか。翌朝の朝食の席で、先輩方が深刻な顔で言うのです。「おい。昨日はどんな夢を見たか？『ごらんください！』って叫びながら万歳してたぞ。」先輩方がそう言うのですからそうだったのでしよう。しかし当の本人は、どんな夢だったか思い出せませんでした。

いろいろ想像してみました。良い夢と悪い夢の両方を考えました。良いほうは、タラントンのたとえです。預けられたお金をうまく運用して、ご主人にこう言っている場面です。「御主人様、五タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました。」(マタイ 25・20) きっとこうだろうと思います。そうに違いない！

しかし、悪いほうの可能性もあるでしょう。本日の朗読の金持ちは「父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます」(ルカ 16・24) と叫んでいます。字面はありませんが、「(御覧ください。)わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます」と夢の中で叫んだのかもしれない。

良いほうはこれ以上考える必要はありませんが、悪いほうの可能性は今週の反省材料として考える価値があります。金持ちがもだえ苦しんでいる場面でいくら叫んでも、「渡ろうとしてもできないし、越えて来ることもしない」場所なのですから、今のうちに将来のためにできることはしなければなりません。

先週、非公開ミサでこう呼びかけました。「(9月25日は)世界難民移住移動者の日です。世界中の見ず知らずの人と友達になるために、自分の持ち物を手放す日とも言えましょう。私たちがこの世の持ち物で世界中の難民移住移動者と友達になれば、すべてのいのちを守る一助となります。」最近、全くの見ず知らずの方から「今後実施予定の耐震補強のために使ってください」と寄付をいただきました。21世紀を旅する田平教会のために志をくださる人に倣うことは、今すぐにでもできるわざです。

ただ私は、「司祭」という身分で将来のために慰めを受ける積み立

てが必要です。紫の衣を着ることもあるし、毎日ぜいたくに暮らしていると言えば、言えなくもありません。このままの状況では、おそらく私はもたえ苦しむでしょう。神様がお世話してくださらないければ、誰もお世話してもらえない人々のために、できることを今すぐにでもしなければなりません。

こういう方法があるかもしれません。イエスは別のところで言っています。「あなたは施しをするときには、偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。はっきりあなたがたに言うておく。彼らは既に報いを受けている。施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。あなたの施しを人目につかせないためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。」(マタイ 6・2-4)

中田神父がヨボヨボじいちゃんにならずに働くことができるのは、あと残り 20 年くらいでしょうか。もう、誰のために何をお世話したか、大っぴらに話さないことにしましょう。誰からも面倒見てもらえない人のために何かお世話できたとしても、それを言い触らせば私の報いはこの世限りになります。だから、もう言わない。これで、この世の富で天に富を積むことにしましょう。

ここから、あと二つのことを話します。一つは、「私にとって、もたえ苦しむ結末を見なくて済む方法は何か」を考えることです。もう一つあります。それは、物語の中の金持ちの言葉です。「父よ、ではお願いです。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。」(16・27-28)

この金持ちは、最終的に自分自身のことは断念しました。もはや取り返しがつかないと悟ったからです。けれどもまだ地上に残っている兄弟たちは救えるかもしれないと考えました。私たちも、一応この辺りも考えましょう。私自身はもはや取り返しがつかないと悟った時、「父よ、ではお願いです」と、誰かの救いのために行動できるでしょうか。

自分自身、取り返しがつかないのであれば、誰が救われても同じことのような気がしますが、それでもほかの兄弟たちのことをこの金持ちは心配しました。私は本当に、自分はダメでも、ほかの人は救ってやっってくださいと言える人だろうか。ここは考えておきましょう。ひよっとすると、この「父よ、ではお願いです」が、私を最後の最後に救ってくれるかもしれません。



年間第 27 主日 (ルカ 17:5-10)

あなたにもいつか本物の信仰が必要になる

三年前の説教を土台にしています。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」(17・6) からし種にたとえられた信仰を掘り下げてみましょう。私たちにも、あっと驚く行動を起こさせる「からし種一粒ほどの信仰」があるでしょうか。私たち皆が「からし種一粒ほどの信仰」を見つけて帰ることが、今週の課題だと言えます。

古い話ですが、私の父が生きている頃、刺身を食べるのに、唐辛子の種を箸でこさぎ、醤油に落として食べていました。小学生だった私に「食べてみるか」と勧められて刺身を食べると、あまりの辛さに魚を口から出すほどでした。父がそれを見て笑っていた、そんな記憶があります。

それから何年かして父は船で指を機械に巻かれ、障害が残ったので船を降りて牛を飼い始めました。牛は藁を食べると当然フンをします。そのフンを乾かし、袋詰めにして販売していました。袋詰めは、中学生の頃から私も手伝いました。ただすべてのフンを処理したわけではなく、一部は場所を決めて捨てていたのです。

その、フンを捨てる場所のそばに、唐辛子が植えられていました。山を開墾して作った牛の放牧場のそばは畑だったので、唐辛子も植えられていたのでしょう。残り物のフンを捨てるそばにあった唐辛子は、いつの間にかピーマンのように育っていました。ある時興味半分で、私はそのピーマンの大きさの唐辛子をちぎって、食べてみたのです。

唐辛子が、ピーマンになれるはずがありません。食べたら火の出るような辛さでした。誰も見たことのない大きな唐辛子。唐辛子がピーマンのように育つことに、素直に驚いたのです。あっと驚く成長、誰も見たことのない巨大な実が、父の亡くなった今でも牛小屋のそばで見かけます。

さて福音朗読、使徒たちが、「わたしどもの信仰を増してください」(17・5)と願いました。私たちは腕を磨いたり技術を向上させたりという経験を皆持っていますが、使徒たちが考えていた「信仰を増してもらおう」ということも、何か経験の積み上げやより大きな信仰を足してもらおうような感覚だったかも知れません。

しかしイエスは、真の信仰は小さなからし種に示されると言います。家庭で使う練りからしの中に、ほんの少し種が残してあるチューブがあるのを皆さんご存知でしょう。聖書のからし種もあの粒をイメージしてよいと思います。あの小さな種に、イエスの考える信仰は示されるというのです。

私たちはどうかすると、大きい力があれば大きいことが成し遂げられると思いがちです。けれども他方で、小さな力が大きな事を

成し遂げることも知っています。車のタイヤをパンクさせるのはタイヤを半分に切ったからではなくて釘一本が開ける小さな穴です。仰向けになっている人の動きを制するのに大げさな道具は必要ありません。指一本でおでこを抑えるだけで、どんな大男でも押さえつけることができるのです。「からし種一粒ほどの信仰」とはそういうことでしょう。

私はたまにピーマンやパプリカを見ると、「これはひょっとしたら唐辛子なのではないか？」と思うことがあります。実際にはあり得ないことです。あり得ないことですが、私は学生時代にそのあり得ないことを見たわけです。

「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば」イエスが言われるこの「もし、あれば」と言っているのは、「あなたたちの信仰が本物であれば」とか、「あなたたちの信仰が本当に神から与えられたものであれば」そういう意味ではないでしょうか。

もし私たちの持ち合わせている信仰が本物であれば、神から与えられたものであれば、闇の中でも光を見つけ出し、絶望の中でも希望を見つけ出します。暗闇の中で光を見つけ出す信仰は、真っ暗な夜空に見える星のようにごくわずかの光です。しかしそれは、手探りで生きている人生にあっても失うことのない確かな道しるべです。

また絶望の中で見つけ出す信仰は、あらゆるものを打ち壊すシヨベルカーのような信仰ではありません。折れかけた水草を支え続け、今にも消えそうな灯心を消さない、微かなのだけれども確実なよりどころなのです。小さな持ち物だけれども、闇に光を見だし、絶望の中で希望を拾う。それこそが「からし種一粒ほどの信仰」なのでしょう。

みなさんそれぞれ、信じていたものをたたき壊され、何も信じられなくなる時を味わったことがあるでしょう。この世のものが何も信じられないのは確かですが、それでも人が死の淵から生きて戻ってくるのは、神がこの世で与えてくださる「からし種一粒ほどの信仰」なのです。「信仰は二の次で、まずはこの世の生活だ」そんな思い違いから抜け出せた時、私たちは本物の信仰に出会うのだと思います。



年間第 28 主日 (ルカ 17:11-19)

あなたの生活があなたを救う信仰であれ

「自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。」(17・15) イエスは確実に十人全員をいやしたのですが、サマリア人で、「外国人」扱いされている一人だけが、「ほかの九人」とは違う何か気付いてイエスのもとに戻ってきました。ほかの九人が気付かなかったものとは何だったのでしょうか。

懐かしい思い出があります。高校の化学(かがく・ばけがく)の授業で「化学式」について先生が説明しているときでした。水(H₂O)とか、そういうのを黒板に書いているときに、何かの化学式を展開しながら、「この化学式に当てはまるものが近くにある。君たちには見えるか？」と先生が尋ねるのです。

40年くらい前の話なので、実際に黒板に書かれた化学式は思い出せません。先生がこう続けました。「ヒントをあげよう。外の景色を見てごらん。」言われて生徒が皆、外の景色を眺めたとき、私はあることに気付いて景色を見るのをやめました。

すると先生がすぐに反応します。「中田、なぜ外の景色を見るのをやめたのだ？君には何かが見えたから景色を見るのをやめたのか？」そこで私はこう言いました。「先生が仰りたいのはガラスのことですね。」

ネットで調べると、ガラスの70%を占める主成分は「ケイ酸」で、「ケイ素・酸素・水素」の化合物です。そういう化学式が書かれてあったのかも知れませんが、化学式はまったく私の頭に入りませんでした。たまたま私は、先生が求めている答えを見つけ出したのでした。

いくらか、今日の奇跡物語の参考になったでしょうか。物語に登場している十人は、間違いなく「重い皮膚病」という「病(やまい)」から快復したのですが、イエスが気付いてほしいものは別にあったのです。奇跡の向こうにあるもの、人間のお世話では与えてもらえないものを与えられた。そこに気付いたのは十人のうちの一人、ユダヤ人から嫌われていたサマリア人だったのです。

イエスはこのサマリア人と同じく、「神を賛美するために戻って来た者」(17・18)に、「あなたの信仰があなたを救った」と声をかけます。私たち人間は、この世にあってさまざまなものを与えられて生きています。そのほとんどが、与えられても消えて無くなってしまいうこの世限りのものです。

しかし、実は消えて無くならないものも与えられています。人間は体と魂を持っていますが、魂は神が与えたものです。ほかにも、自由意志も神が与えたものです。人間には、この世が与えることのできるものと、神しか与えることのできないものと、両方が必要なのです。

大声で神を賛美しながら戻ってきたサマリア人は、この病からの快復が、神から与えられたものであることに気付いたのです。物語の中でイエスがなさったことと言えば、「祭司たちのところに行って、体を見

せなさい」(17・14)と言われた、それだけでした。

イエスはこの世のものは何も与えなかったのです。しかし十人全員がいやされた。彼らは二通りの反応をしたのです。九人は「喉元過ぎれば熱さ忘れる」で、いやされた原因が何かを忘れて、有頂天になって家族の元に戻り、元の生活を始めました。ところが一人は、見えるいやしの向こうにあるものに気付き、自分が今あるのはイエスのおかげであると理解し、戻って感謝したのです。

「あなたの信仰があなたを救った。」(17・19)私は違う言い方もできると思います。「あなたの生活があなたを救った。」多くの人が見えるもの、感じられるものだけに価値を置いて生きていますが、十分の一の人は、見えるものの向こうにある見えないものに価値を置いています。

金曜日に病人訪問に回っていて、稲刈りを待つ田んぼが目に留まりました。収穫する人は、きっと喜びに沸くと思いますが、その時「お米ありがとう」と感謝するのでしょうか。私だったら「神様ありがとう」と感謝するでしょう。

収穫の実りを見て、多くの人はいやされた「お米ありがとう」と言うかも知れませんが、しかし私たちキリスト者は、その中の一人であったサマリア人のように「神様ありがとう」と感謝したいものです。

日々の生活の中で、イエスに感謝と賛美をささげる生活を選ぶ人はごく一握りかも知れませんが、それでもあえて「わたしが今あるのはイエス様のおかげ」と言い切れる「十人のうちの一人」になりたいのです。なぜなら、「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」と言ってもらえたのは、あえて狭い道を選んだサマリア人だからです。



年間第 29 主日 (ルカ 18:1-8)

司式者の唱える祈りに深くあずかれるように

いよいよ、新しいミサ式次第を使い始めるまで残り一ヶ月ちょっととなりました。司祭館に、長崎教区が発行した新しいミサの式次第が届きました。以前使っていた日曜日の「聖書と典礼」の大きさ（B6版）でした。こうなると通常の祈祷書のほうをB6版に変えてもらいたいくらいです。

皆さんはこの前始まった連続テレビ小説「舞いあがれ」ご覧になっているでしょうか。高畑淳子さんが五島の素朴なおばあちゃんを熱演していますが、その中で「およ～」と相づちを打つ場面があります。生粋の五島生まれの中田神父の理解では、「およ～」とは「そう。その通り」という相づちだと思っていますが、テレビでは「そう。その通り」に当てはまらない場面でも「およ～」と言っているので首をかしげています。

「おはようございます」「およ～」「こんにちは」「およ～」「こんばんは」「およ～」根っからの五島人でもそこまで「およ～」とは言いません。それと、主人公と仲良くしてくれている小学生も、「およ～」と言っていますが、今の時代に「およ～」と言う子供はどこを探しても居ないと思います。あのドラマは昭和の古き良き時代を反映しているようです。

さてようやく届いた「新しいミサ式次第」の中の「叙唱前句」について少し触れたいと思います。ちょうど本日の聖書と典礼七頁に取り上げられています。具体的には「主は皆さんとともに」「またあなたとともに」「心をこめて」「神を仰ぎ」「賛美と感謝をささげましょう」「それはとうとい大切な務めです」この部分になります。

この叙唱前句の目的は、解説してくださった神父様の説明を引用すると「賛美と感謝の祈りを唱える人と、参加している信者が互いに心を合わせ、信者が司式者の唱える祈りに深くあずかるようにすることです」となっています。

その中で特に、「信者が司式者の唱える祈りに深くあずかるようにすることです」この部分に中田神父は深く心を打たれました。信者が司式者の唱える祈りに深くあずかるためには、当然、司式者がそれ相応の唱え方、祈り方をしなければならない。私はそう理解しました。

信者が司式者の祈りに深くあずかれるのは、司式者の祈りが信者の心に響くときでしょう。司式者の祈りが信者にとってまさに願って欲しい祈り、神様に届けて欲しい祈りに聞こえたとき、司式者の祈りに深くあずかれるわけです。一つの答えを与えられた思いがしましたし、身の引き締まる思いがしました。

ミサの祈りの言葉ではありませんが、一人の司祭の言葉が深く心に響いた話を紹介したいと思います。初めてお仕えした川添神父様の、滑石教会にいた時代の体験です。ある日神父様が、市内の路線バスに乗ろうとバス停に向かいました。するとそこに、中学校の生徒と思われる学

生がいました。金髪の部分染めを入れて、いかにも「俺に近づくな」みたいな雰囲気漂わせていました。

また同じ曜日の同じ時間に神父様がバス停に行きました。するとあの金髪の少年とまた会いました。そこで川添神父様は親切心でこう言ったそうです。「おい。気付いているか知らんけど、髪の色にペンキの付いとるぞ。」この少年は何と、次に会ったときは髪を元に戻していたそうです。よほど、神父様の言葉が心に刺さったのでしょう。

もし同じ場面で、「君は格好いいと思っているかも知れないが、君の髪型は格好悪いぞ」とまともに言っていたなら、その少年は態度を変えなかったかも知れません。言葉は時に、人の心に深く染みこんだり、人の心を閉ざしたりするものです。この体験を川添神父様から教えてもらったとき、日常でも心に響く言葉を届けることのできる川添神父様は、すごい人なあと思ったのでした。

ルカ福音書の 22 章、過越の食事の冒頭で、イエスが珍しく個人的な感情を漏らします。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。」(22・15) この祭壇で繰り返されていることは、イエスが切に願っていたことです。それが司式者の祈りで信者に伝わるように、これから心がけたいと思います。

少し、今週朗読された福音にも触れておきましょう。一人のやもめが、傲慢極まりない裁判官のもとにやって来て訴えます。「相手を裁いて、わたしを守ってください」(18・3)。この女性の言葉はボディブローのようにじわじわ効いてきます。ボクシングでボディブローは、効き始めると地獄のような苦しみを覚えるそうです。耐えられなくなった不正な裁判官が、本来の務めを果たします。

どんなに傲慢な人でも、不正な人でも、良い部分はあるわけです。やもめの訴えは不正な裁判官からさえも正しい振る舞いを引き出す訴えでした。不正な裁判官から良心のかけらを呼び覚ます、心に響く言葉を持っていたやもめとは、イエスのことだったのかも知れません。

司祭も、毎週の説教で言葉を絞り出しています。赴任した教会によっては教会新聞にも毎月言葉を絞り出します。その務めの中で中田神父も鍛えられ、七年のうちの何回かは、「信者が司式者の唱える祈りに深くあずかる」その助けになったかも知れません。そうした体験が一度もなかったとしたら、この七年間の中田神父の説教や「瀬戸山の風」の原稿は時間の浪費、印刷資源の無駄遣いだったかも知れません。

たとえ力不足の司祭だったとしても、イエスはこのミサの中で司祭一人ひとりを使って、昼も夜も叫び求める人の声に耳を傾け、父なる神に届けてくださるのです。皆さんが祈りの中で願い求めていることは、イエスが目の前の司祭を通して必ず父なる神に届けてくださいます。信頼して、新しいミサ式次第が使われ始める待降節第 1 主日以降も、心を合わせてミサに参加することにしましょう。

年間第 30 主日 (ルカ 18:9-14)

私の祈りは私の生き方



イギリスの首相が在任 45 日で辞任することになりました。45 日で職を辞した経験はありませんが、ある意味、勇気の要る決断だったと思います。司祭館でそれに関連して、イギリスの首相は定期的に国王に国内情勢を報告する務めがあると話していると、王位継承について話が広がりました。

「チャールズ国王の後継者はウィリアム王子だと思うけれども、どうしてウィリアム王子とヘンリー王子ではあんなに髪の毛に差があるのだろう」という話になり、私がたとえを出して説明しました。「以前、鯛ノ浦に帰って家族に会ったとき、私の弟にも会ったでしょ。私と弟の髪の毛の毛のようなものだよ」とたとえましたら、「およー」と納得され、私はあまりにもすんなり納得したので正直腹が立ちました。

たとえ話は、内容を的確に理解するものであれば「このたとえでなければならぬ」という縛りはないと思います。まさに今週の福音朗読箇所のとえがそれに当てはまるでしょう。「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。」

(18・10) 二人の組み合わせは、ほかの組み合わせでも当然良かったわけです。深く掘り下げなければならないのは、18 章 9 節「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々」むしろこちらのほうです。

イエスがなぜ、「うぬぼれている人」を相手になさるのか。その辺の事情がよく理解できませんでした。そこで、たまに参考にする「別の翻訳」に当たることにしました。私がこういうときに使うのは、ギリシャ語聖書に、英語の直訳を当てて説明している本です。そこには 18 章 9 節のギリシャ語本文を次のように英訳しています。

(And) He also spoke this parable to some of those having relied on themselves, that they are righteous, and despising the rest:

まあ皆さん英語ペラペラなので説明しなくても良いと思いますが、「うぬぼれて」という部分が”relied on themselves”という表現になっています。ここで私は納得がいききました。”rely on myself”つまり「自分により頼む人」を教え諭すために、イエスはたとえを話されたのです。

たとえ話に登場するファリサイ派の人は、完全に自分に頼った祈りを唱えています。「神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。」 (18・11-12)

これに対し、徴税人は自分に頼ることができないと絶望しているので、完全に神により頼んで祈っています。「神様、罪人のわたしを憐れ

んでください。」(18・13)当然、自分により頼む人の祈りよりも、神により頼む人の祈りが「義」とされるのではないのでしょうか。

別に難しい話をしなくても、神はたくさんの祈りを毎日毎瞬間聞かされているわけですから、自分自身により頼む人の祈りなど右から左に抜けて気にも留めていないのかも知れません。自分自身により頼んでいるなら、神様も必要ないと言えるかも知れません。

そこで振り返って、私たちの祈りはどうでしょうか。私は、誰により頼んで祈っているのでしょうか。特に何かを背負っている人、上に立つ人や、家族を背負っている人は、自分自身に頼って祈るべきでしょうか。もっと言うと、自分自身に頼って生きるべきでしょうか。

ついこの前の話です。晩のロザリオと一緒に参加して、珍しく真面目にロザリオを唱えていましたら、ルカ福音書「七十二人を派遣する」この箇所が思い浮かんで、10章7節「その家に泊まって、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。」という引用とその解釈が、セットで天から降ってきたのです。

まったく新しい解釈・気づきが与えられました。ありがたいなあと思い、すぐにスマホでメモを取りました。自分自身により頼んでロザリオを唱えていたらこうはいかないでしょう。あの時に限って言えば、「私を憐れんでください」と祈っていたのだと思います。

「祈る」とは、「生きる」ことなのかも知れません。自分自身により頼んで生きていても、かつて謳歌していた若さは失われ、体力も衰え、出会った人の名前すら忘れてしまう始末です。こんな頼りない自分に頼って生きていくには、人生はあまりにも長すぎます。

むしろ、神に頼って生きるなら、長い人生の中で何を失っても恐れる必要はありません。祈りはそのことを体験する大切なひとときなのです。今からでも遅くはありません。私が、私自身により頼む祈りしかできないのなら、すべて横に置いて出直しましょう。今まで見下していたあの人この人が、ひよっとしたら神により頼んで祈る姿を、私に教えてくれるかも知れません。



年間第 32 主日 (ルカ 20:27-38)

主はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神

十一月に入りました。死者の月です。3日(木)には「瀬戸山墓地に眠る死者のためのミサ」が行われましたが、参加されたでしょうか。今週の朗読は、死者の月である十一月と結びつけると、学びが得られるかなあ、と考えました。

ふだんの生活であまり使わない言葉を知らないのは仕方の無いことかも知れませんが、この前NHK趣味の園芸でとある言葉が使われていて、その意味が分からずショックを受けたことがありました。プランターで野菜を育てるという内容でしたが、先生が生徒に「まめに見ておかないと『とう立ち』しますから気をつけましょう」と指摘して、生徒は先生に「分かりました」と答えていたのです。

ここで使われた「とう立ち」「とうが立つ」という言葉を、司祭館で尋ねたわけですが、すると「ほら、『とうの立つ』っていうじゃないですか」とそのまま返されました。調べてみるとどうやら、「茎が成長しすぎて、頃合いを過ぎること」を意味するそうです。知らなかった。

さて今週の朗読でも、「知らなかった」で終わらないように、しっかり学びを持ち帰りましょう。朗読の中で、イエスがサドカイ派の人々に指摘する部分「死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している」(20・37)を取り上げたいと思います。これは出エジプト記3章からの引用です。該当する箇所を読んでみましょう。

出エジプト記3章6節です。「神は続けて言われた。『わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った。」これは神がモーセに語られた言葉ですが、モーセは神の声をどのように聞いたのでしょうか。

過去の偉大な人物を並べて、「これこれの人の神である」とただ言っただけだと受け取ったでしょうか。そうではなく、先祖たちは神から忘れ去られることなく、今も神のうちにあって生きていると受け取ったのではないのでしょうか。先祖たちは、神が名前を呼べば、いつでも返事ができるようにその時を待っているのです。

アブラハムが生き生きと登場する物語を思い出しました。「金持ちとラザロ」の物語です。金持ちが死ぬと、「宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた」(ルカ16・23)とありまして、金持ちがアブラハムに叫ぶわけですが、「父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。」(16・24)

これは当時すでに知られていた物語だと思われます。アブラハムは物語で生き生きと登場します。これだけでも、イエスが「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生

きているからである」(20・38)と言ったことが十分うかがえます。イエスを信じるすべての人にとって、人は復活のその日を待って生きている人なのです。

人は寝起きして時間が進みますがこの時間には限りがあります。一方神を信じて眠りについた人は、眠っている時間は長いかも知れませんが、復活の希望があり、いつまでも神と共に生きることになるのです。

十一月、死者の月です。多くの人が身近な人を偲び、墓を尋ねて祈ることでしょう。墓に眠る人は、死の瞬間から復活の命が始まっています。次にお墓で祈るときには、ぜひ「復活の命が始まっていること」を心に留めて祈っていただきたいものです。

年間第 33 主日(ルカ 21:5-19)

年間第 32 主日 (ルカ 21:5-19)

主に信頼して命を勝ち取る



新型コロナの感染者がまた増えだしました。せっかく長崎県の感染警戒レベルが1に下がったところだったのに、あと二週間もすれば夏の感染者数を超えるかも知れないと言われています。土曜日にも海外からおいでになった家族に、「新型コロナのために、中には入れません」と事情を説明したところでした。さらに、このたびの外壁の落下があって、堂内の拝観を許可してあげたいけれどもそれができない状態が続いております。もどかしいです。

司祭館玄関の階段に、黄色いチェーンを渡しました。観光客がちょいちょい階段に上がって、教会の写真を撮ろうとします。それを遠慮してもらうために取り付けました。ご不便をかけますが、チェーンは輪っかを引っかけるだけの簡単なものですので、ミサをお願いに来たり、主任司祭に問い合わせがあったり、そうした本当の用事の方は遠慮なく階段を上がっておいで下さい。

今週の福音朗読、「終末」に関する出来事が取り上げられています。「世の終わりが近づいている」と言えば、混乱させるように聞こえるかも知れませんが、イエスもはっきり言っているように、混乱をもたらすように見える出来事は、実は証しをする機会です。人々が右往左往するなかで、私たちキリスト信者は、詩編の次の言葉を思い出すのです。「主に従う人はとこしえに揺らぐことがない。」(詩編 112・6)

「思い出す」と言っても、実際には思い出せなくても構いません。人々が右往左往するなかで、主に信頼してしっかりと立っているなら、そのキリスト信者は態度で詩編 112 編を歌っているのと同じだからです。私たちの皆が、主に信頼していることを「詩編の 112 編にある通りですよ」と言う必要はないのです。

もっと言うと、キリスト信者だから福音書の何章何節と言えなくても良いのです。言えることに越したことはありませんが、聖書が教える生き方を備えて下さるのは神様の方だからです。イエスは言っています。「どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授ける」(21・5)。私が福音書の何章何節を覚えているから「対抗も反論もできないような言葉と知恵」を身につけるわけではないのです。何も心配要りません。

問題は、慌てふためくとき、右往左往するような場面で、主への信頼を失ってしまうことです。主に固く信頼する人、天地がひっくり返るようなときでも、主への信頼を失わない人は、命を勝ち取るのです。

ひょっとすると、今回の新しいミサの式次第も、右往左往するような出来事と言えるかも知れません。「また祈祷書が変わるのですか？」何人もの人から聞かれましたが、大事なことは、式次第が変わっても、変わらず私たちを招いておられる主に信頼することです。この主への信頼によって、このたびの大転換を乗り越えて、命を勝ち取ることにしましょう。



王であるキリスト (ルカ 23:35-43)

あなたにとっての「王であるキリストの祭日」はいつ？

今週一週間は、従来のミサ式次第でささげる最後のミサです。中田神父としては、一刻も早く新しいミサ式次第に移りたいくらいです。ただ、最初はどううまくいかないことも多いだろうなあと心配もあります。皆さんの協力を頂きながら、新しいミサ式次第でささげるミサを充実させていきたいです。

朗読台に「張り紙」をしました。朗読者は次の日曜日から「神のみことば」と唱えなければなりません。それで、うっかり忘れていても思い出すきっかけになるようにと、張り紙をさせてもらいました。そして朗読者が「神のみことば」と言ったら、会衆の皆さんも「神に感謝」とはっきり答えてください。

王であるキリストの祭日、年間の最後の主日を迎えました。今日はちょっと違ったことを尋ねます。皆さんには、忘れられない「王であるキリストの祭日」があるのでしょうか？そしてそれはいつでしょうか？

中田神父にとっては、2019年の「王であるキリストの祭日」です。この日は11月24日でした。これでお分かりでしょうか？思い出せない人のために詳しく言います。この日はフランシスコ教皇様が来日されて、長崎でミサをささげた日曜日、「王であるキリストの祭日」でした。

この日、私たちは大勢で長崎に駆けつけ、ミサに参加しました。ミサに参加できなかった人も、テレビでその様子を見届け、テレビでも参加が難しかった人も、その時間に、それぞれの場所で心を合わせて祈ったはずです。2019年の「王であるキリスト」は、日本中のすべてのキリスト者が、また映像を見た世界中のキリスト者が、「イエス・キリストは王である」と讃えたのです。

あの日、直接ミサに参加した人もいるでしょう。そうでない人もいるでしょう。近くにいたかそうでないかは問題ではありません。もっと大切なことがあります。それはイエスを心から王であると唱えたかどうかです。今週の朗読に立ち帰ります。

朗読は十字架の場面ですが、さまざまな場所からイエスをあざける声が聞こえます。議員たちは、いちばん遠く離れて、他人事のようにあざけります。兵士たちも近寄ってあざけります。そしていちばん近くにいるのが、同時に十字架にはりつけにされた犯罪人です。

犯罪人のうちの一人は、イエスをののしりましたが、もう一人はイエスを「王」として認めました。「イエスよ、あなたの御国においでになるときは、わたしを思い出してください」(23・42)。近くにいるからイエスを王と認めることができたわけではありません。十字架から降りないままのイエスの中に「王の姿」を見つけた人だけが、「あなたの御国においでになるときは、わたしを思い出してください」と言うことができたのです。

フランシスコ教皇様がおいでになったとき、私たちはありとあらゆる

ることを教皇様のために都合を付けました。教皇様が「王であるキリスト」の目に見える代理としておいでくださったからです。ですから今日私たちは、いつもよりもいっそう意識して一日を過ごしたいのです。「王であるキリストの祭日」を祝っている日曜日として、「イエス・キリストは王である」この信仰を再確認する日曜日として、過ごしたいのです。

イエス・キリストのために、何かを横に置いて日曜日を過ごす。ふだん、日曜日にしかできないことを抱えている人もいるでしょう。週に一回の楽しみとして、日曜日に行っている趣味や娯楽があるかも知れません。晴れても雨が降っても欠かさずしている楽しみがあるかも知れない。

それらのどれか一つでも横に置いて、「イエス・キリストは王である」と、自分にも人にも信仰を表すための何かを実行してください。たとえばそれは、家に帰って新しいミサ式次第をていねいに読み返すことでも良いでしょう。

中田神父も、届いた儀式書をよく読み返して、今週一週間練習を積んでおこうと思っています。こうして私たちは、2022年の王であるキリストを、記憶に残る日とすることができるのです。

待降節第1主日(マタイ 24:37-44)



待降節第 1 主日 (マタイ 24:37-44)

すぐに「またあなたとともに」と言える準備を

いよいよ、「新しいミサの式次第と奉献文」を使ってのミサが始まりました。福音朗読に「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである」(24・44)とありますが、「ミサ式文の変更」という、「思いがけない出来事」で私たちは試されています。

用意しましょうと呼びかけたのに用意しなかった人は、「そのとき、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される」(22・40-41)このように置いて行かれることとなります。思いがけない出来事でしたが、今からでも私たちは、救い主の到来の準備に充てることができます。大人なので事情を理解できます。幸いなことです。

金曜日の中学生のけいこで、ミサ式次第の最終確認をしたあとに、「明日から、これまでのミサ式次第とはお別れです。さようなら」とおおげさに伝えますと、中学1年生の女子三人組はあっけらかんとしていて、「さようなら～」と手を振ってくれました。

大人の人、特に後期高齢者の皆さんは「人生の最終盤でなぜあらためてミサ式次第を覚えなければならないのか」という思いでしょう。ただ、中学1年生を思うと、ようやく12年生き始めたばかり。ミサの式次第も保育園で覚えたとすれば5年6年お世話になったに過ぎません。ですから未練も何もないのだなと思いました。この子供たちがこれから60年70年使用していくための典刷新です。どうか、ご理解ください。

実は今回のミサ式次第と奉献文の変更は、主日のミサに限ったことではありません。生活全般に関わる変更になると言って良いでしょう。食べたり飲んだり、めとったり嫁いだり、人を送り出したり、こうした日常の出来事すべてに、ミサの式次第と奉献文の変更は関係しています。今日以降に結婚式、通夜、葬儀、納骨、その他何かしらの祝福を行うなら、どの儀式であっても、新しいミサ式次第の少なくとも一部分は関わってくるからです。

「主はみなさんとともに」という司式者の招きは、主日のミサ・週日のミサに限ったことではありません。あらゆる儀式を結ぶときに、司祭のこの招きが使われています。さらに困難なことに、今この場でおささげしているミサはかろうじていろいろな年代の方が参列していますが、保育園児だけ、高齢者だけの場所でミサをすることもあります。

つまり、あらゆる人が「目を覚まして」「用意していなさい」と言っているのです。思いがけない今回の変更は、呼びかけにどれくらい応えてくれたかを確かめようと主がおいでになる格好の機会です。今からでも遅くはありません。用意して、生活の中に、心の中に、主をお迎えすることにいたしましょう。



待降節第2主日 (マタイ 3:1-12)

「今年のクリスマス」と「来年以降のクリスマス」を待つ

待降節第2主日、洗礼者ヨハネが登場します。彼は「悔い改めよ、天の国は近づいた」(3・2)と呼びかけます。しかし4章17節ではイエスも、宣教活動の初めに「悔い改めよ、天の国は近づいた」と言っています。どこをどう見ても、違いは見られませんでした。念のため別の言葉で読み比べても、違いは見つかりませんでした。今年の待降節第2主日、違いのないところに違いを見つけることにしましょう。

「悔い改め」は、罪な生活から離れて、生き方を神に向けるということです。「罪な生活は送っていない」とお考えでしょうが、自分により頼む生き方、この世のものにより頼む生き方は、突き詰めると「罪な生き方」なのです。

ファリサイ派の人々、サドカイ派の人々は「我々の父はアブラハムだ」と考えていましたが、ここには血筋という、この世の要素が透けて見えます。アブラハムの子孫だというだけでは、神に正しいと認められないのです。むしろ、生活を神に向き直らせることが大切なので、その点では群衆、徴税人、兵士、遊女達のほうが真剣に悔い改めの実を結ぼうとしました。

さて違いを見つけるとっかかりとして、洗礼者ヨハネは「天の国は近づいた」と伝えるけれども、「天の国」についてどんな国なのかを示すことができなかつたのです。ここがイエス様との違いです。イエスも「悔い改めよ、天の国は近づいた」と言いますが、洗礼者ヨハネと違って「悔い改めの生き方とは、わたしの生き方のことです」「天の国とは、神であるわたしの支配が及ぶその日のことです」と、はっきり言うことができました。

洗礼者ヨハネが促す準備は、自分を荒れ野に導いた聖霊によるものです。イエスが「悔い改めよ、天の国は近づいた」と促す準備は、誰にも寄り頼むことなくご自身から出ていました。告げ知らせる言葉に一字一句違いがなくても、洗礼者ヨハネが告げる場合とイエスが告げる場合とでは大きく違うことが感じ取れたのでしょうか。違いのないところに、違いを見つけることができたのでしょうか。

ここまでの話を踏まえて、皆さんに聞きたいことがあります。中田神父が「今年のクリスマスと来年以降のクリスマスの違いは何ですか？」と聞かれたらどう答えるか考えてみてください。「今年のクリスマスも来年以降のクリスマスも同じでしょう」と考えますか？私は近い将来、今年のクリスマスが見納めになるだろう、という考えを持っています。

なぜそう言うのかは、言わなくてもお分かりでしょう。この田平教会聖堂で、来年以降にクリスマスが迎えられない可能性があるからです。すぐ一年後とは断言できませんが、必ずその日はやって来ます。すると、同じクリスマスの準備で良いものでしょうか？例年のクリスマスの準備

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。
とは違う何かが必要ではないでしょうか。

例年、脇祭壇を使った馬小屋でクリスマスをお迎えしてきました。しかし今年は、脇祭壇を使った馬小屋がなくても、クリスマスを迎えられる。その心の準備をしておきましょう。クリスマスのその日は、主任司祭が御子様を抱いてこの聖堂の通路全体を使って行列します。電気を落とした中で、聖堂ならではの荘厳さがあるわけですが、その荘厳さがなくても、クリスマスを迎えられる。その心の準備が今年が必要です。

今年のクリスマスで目にしたものの多くが、近い将来取り上げられるかも知れません。それでもクリスマスを揺るぎなく迎えられる。その自信というか確信を得るためには、今年、内面の準備がより重要になってくる。中田神父はそう思います。

幸いに、神の御子は人が誕生するときに期待できるものを何一つ与えられずにお生まれになりました。仮に私たちが、田平教会聖堂で期待できるものを取り上げられたとしても、神の御子は何もないところに、すべてを与えるためにおいでになります。これからどうなっていくのか、見えない中にはっきりと生き方を神に向ける姿を見せようとおいでになります。「わたしをごらん」と招くために、すべてを取り上げられても私たちのもとにおいでになるのです。

そのことを頭に置いた上で、今年のクリスマスの準備を進めましょう。今年の待降節は、今年のクリスマスのためだけの待降節ではありません。同じ準備で、違いを見つけられる年にしなければなりません。来年以降のクリスマスのために、何もないところにすべてをお与えになる神の御子を焼き付けるための時間としましょう。

洗礼者ヨハネは今の時代の人々をイエス様がいよいよ導かれるその時に向けていきました。そのように、私たちは今年の待降節を、見えるものが取り上げられても揺らぐことのない信仰を育てる待降節としましょう。神は、何もないところに、すべてを与えることのできるお方なのですから。

待降節第3主日(マタイ 11:2-11)



待降節第 3 主日 (マタイ 11:2-11)

イエスは私たちに「新しい景色」を見せてくださる

今月、日本中がサッカーで沸きました。中には「ブラボー」と叫んで、はしゃいだ人もいるでしょう。「新しい景色を」という合言葉のもとに、選手達は懸命に努力してくれました。応援もしました。クロアチアとの一戦は夜中の放送でした。観た人は相当眠かったはずですが。

「天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。」(11・11) 洗礼者ヨハネは、救い主とはこのような姿だろうという予想を持っていました。予想していた姿と、耳に聞く姿とが違っていれば、確かめたくなります。洗礼者ヨハネは弟子をイエスのもとに送ります。

「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」(11・3) 遣わした洗礼者ヨハネの弟子たちが「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい」(11・4) と告げられたことは、見たことのない「新しい景色」だったのでした。

遣わした弟子から「新しい景色」を聞く洗礼者ヨハネは、態度を決める必要があります。思い描いていた救い主の姿を見ることができなかつたのでイエスを諦めるのか、思い込みを捨てて「新しい景色」に自分を委ねるか、決断が必要でした。最終的に洗礼者ヨハネは、「新しい景色」に身を委ねる決断をします。のちにヘロデの妻ヘロディアの策略で命を落とすこととなりますが、その時にはすでに、まだ見ぬ「新しい景色」に思いを馳せていた。私はそう考えています。

思い込みを捨てて、「新しい景色」に自分を委ねる。この態度は今まさに私たちに求められていると思います。それは「新しいミサの式次第」です。司式者も会衆の皆さんも、まだ戸惑いながら唱えています。最近の中田神父で言いますと、聖体拝領の招きでつい「神の子羊の・・・」と言ってしまいます。このたびの変更で「世の罪を取り除く神の子羊」をまず言わなければなりません。

先週の説教の続きで言えば、私は平日に何か追加でしなければなりません。ただ、私のことを棚に上げて言いますが、「言い間違えた人はその回数だけ平日のミサに来なさい」と先週言いましたが、一人も来ませんでしたね。「主任司祭が忠告しても誰も見向きもしなくなったら、そろそろ教会を異動すべき合図だ」と、先輩が言っておりました。

ともかく私たちは「新しい景色」を見る機会を与えられたのです。「昔が良かった」との思いを横に置いて、ミサの中で私たちを招いておられるイエス・キリストに信頼しましょう。神様は私たちに、新しいミサの式次第で、人生の中でベスト 8 に入るミサを見せてくれるはずですが。

考えてみてください。田平教会の馬小屋に、幼子イエスは、両手を開いた姿で現れます。まるで司教様が「平和がみなさんとともに」と招いているかのようです。それに対して私たちはどう答えるのでしょうか。「またあなたとともに」と、当然答えるべきではないでしょうか？

待降節第 4 主日(マタイ 1:18-24)



待降節第 4 主日 (マタイ 1:18-24)

ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい

12月14日、長崎教区のペトロ宮川俊行神父様がお亡くなりになり、通夜、葬儀ミサが浦上教会で執り行われました。90歳でした。長崎教区で唯一人東大卒の神父様で、大神学院では集中講義でお世話になりました。純心大学でも教鞭を執っておられたので、純心の卒業生はお世話になっていると思います。主の降誕を一週間前にした今週、宮川神父様の追悼を通してご降誕の最後の準備に充てたいと思います。

私が長崎の小神学校に入学したとき、宮川神父様は小神学校の三階の部屋にお住まいでした。部屋を出入りする一瞬だけしか、お目にかかることはありませんでしたが、部屋中に書物が積み上げられ、通路にも書物が平積みされていたのを覚えています。

宮川神父様は数々の伝説をお持ちでした。長崎東高から旧制一高、のちの東大を受験するのですが、「試験はとても難しいから、しっかり勉強して受けなさい」と先生に言われ、入念な準備をしていきました。東高に帰ると「どうだったか？」と聞かれ、「しっかり準備するようと言うので準備したのに試験が簡単だった」と不満を漏らしたそうです。

東大を優秀な成績で終え、恩賜の時計を頂きました。同僚からは「国を大きく動かす仕事をするに違いない」と思われていましたが、司祭を目指していた宮川青年は上智大学に進みました。「東大を卒業して上智に行く必要があるのか」と問われ、「東大では学べないことを学ぶためだよ」と答えたそうです。さらにローマで研鑽を積み、1963年12月21日、司祭に叙階されました。今年21日で叙階60周年のはずでした。

宮川師の専門分野は「安楽死」を含む生命倫理でしたが、福岡の神学院時代、生命倫理以外にもさまざまな分野を教えていただき、学生がひねりにひねって考えたどのような質問にも明快に、最先端の知見を交えて答えてくださいました。ローマ教皇庁立アカデミーという世界中のカトリック神学者から最高の叡智を集めたグループがありまして、当時、アジアでただ一人そのメンバーにいたのが宮川師でした。

中田神父は伊王島の馬込教会時代に宮川神父様と個人的な付き合いがありました。どんなに優れた人でも何かしら助けを必要とするものはあるものです。宮川神父様は長らく論文の清書をワープロでしておられましたが、あるときから道具がワープロからパソコンに変わりました。しかしパソコンを十分に学ぶ時間が取れなかったようで、しばしば私に「手伝いに来てくれ」と電話がかかってくるようになっていました。

「わざわざ離島にいる私を呼び出さなくてもよさそうなものなのに」と、何度思ったことでしょうか。けれども学生時代にお世話になったことを思えば、あらゆる都合を横に置いてでも手伝ってあげなければと最終的には考え、小菅町の司祭館に通って、パソコンならではの問題解決をお手伝いしました。特に困っていたのが、ワープロは電源スイッチをい

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

きなり切っても内容が失われませんが、パソコンはそうはいかないことでした。重要な論文の内容を消してしまったことがあったそうで、それが私を呼び出す最初のきっかけでした。他にも、ワープロ時代のフロッピー内の論文をパソコンデータに変換し、移し替えたりもしました。

宮川神父様の業績を、長崎教区、日本の教会はどのように受け継いでいったら良いだろうか。中田神父は最近そのことを考えていたのです。神父様は、専門的な研究を志す司祭育成のため、多額の寄付を残されたそうです。中田神父は慶応大学卒ではありますが、平凡なレベルなので宮川神父様のご遺志を受け継ぐことなどできません。本当は脳みそだけ特殊な液体で生かして、今後も活躍してほしいところですがそうもいきません。何が、研究者であった神父様のご遺志に沿うのでしょうか。

1983年に宮川神父様が出版した「イエズスと共に」という本があります。聖書の13の箇所を黙想する手引書で、その中に今週待降節第4主日の福音の箇所を題材に「聖ヨセフへの崇敬」について書かれた章がありました。聖ヨセフが思い巡らしたであろうことを掘り下げて、聖人への崇敬を促すという流れです。B6版で14頁くらいの分量でした。

中田神父はこれまで、ヨセフが「マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した」(1・19)この箇所に明快な説明を持ち合わせていなかったのです。けれども宮川神父様の本の中に、「心もからだも神様のものとなっていたマリアを、あろうことか自分の妻としようとしていた。大変なことになるところだった。ここはいさぎよく身を引き、自分にふさわしい平凡な相手を見つけよう。」このように考えたのだらうと説明していました。深くうなずける説明でした。

さらに宮川神父様の考察は続きます。「しかしわたしが身を引いたとしても、マリアを守ることはできるだろうか？マリアと、マリアの胎の子を守るのは、わたしにしか出来ない務めではないだろうか」ヨセフの夢に現れた主の天使の言葉を思い巡らしたのです。神様の計画は、マリアにだけ課された務めではなく、マリアとヨセフとに共に課された。30年考え続けても解けなかった疑問に、宮川神父様は40年前に答えを示してくれていたのです。

コンピューターの世界では、「集中処理型」と「分散処理型」という方式があります。日本が誇る「富岳」は集中処理型ですが、計算内容によっては世界中のごく普通のパソコンユーザーが協力したときのほうが「富岳」よりも早く結果を導くことがあるそうです。

宮川神父様は例えて言えば「富岳」でした。しかし司祭は世界中にいて、聖書を学び、黙想し続けています。長崎教区の全司祭が聖書を学び、黙想し続けるなら、いつか宮川神父様の業績を、分野によっては引き継ぐことができるのではないか。中田神父はそのように考えました。

長崎教区に教区司祭はまだかろうじて100人おられます。一人もサボらず、分散してミサ説教のために朗読箇所を学び、黙想し続ける。一人もサボらなかつたら、宮川神父様一人の業績は超えるかも知れません。

主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

主日の福音 2022/12/24(No.1213)



主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

救い主誕生は、ごく小さな目立たない働きに宿った

主の降誕おめでとうございます。主の降誕夜半の福音朗読を、「救い主誕生の出来事は、ごく小さな働き、目立たない働きに宿った」このようにまとめたいと思います。お生まれになったイエスをヨセフとマリアは「布にくるんで飼い葉桶に寝かせた」（7節）とあります。「宿屋には彼らの泊まる場所がなかった」とも書かれています。こうした記述は、イエスの誕生がまったく人の目に留まらなかったことを伺わせます。

夜半の福音朗読後半では、主の天使が羊飼いに現れて、「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった」と告げます。当時羊飼いは低く見られていた存在、話題に上らない目立たない存在でした。さらに天使は、「あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」と言うのです。夜半の福音朗読からは外れますが、訪ねてみると、主の天使が告げたとおりの光景を目にしました。

あらためてここで考えるのは、もし当時ユダヤの人々がまことの救い主の誕生を待ち望んで真剣に探し求めていたら、遅かれ早かれ、イエスの誕生は皆に知られて、お生まれになった場所は人だかりになっていたはずです。場合によってはお金に余裕のある人が名乗り出て、「救い主をこんな粗末な場所に置いてはおけない。わたしが整えられた部屋を用意しましょう」こんなことが起こって、大騒ぎになっていたはずです。そうなってれば羊飼いは、「布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子」を見つけることはできなかつたでしょう。

しかし現実はそのではありませんでした。訪ねていってみると、主の天使が告げたとおりの光景を見ることができたのです。つまりそれは、誰の目にも留まっていなかったということです。出来事の大きさで言えば、天地がひっくり返るほどのニュースなのに、誰の目にも留まりませんでした。そして、人から低く見られ、話題にも上らない存在である羊飼いが、救い主に最初のごあいさつをしたのです。

出来事をまとめるとこうなるでしょう。クリスマスと言われるイエスの誕生の出来事は、誰の目にも留まらないほど隠された出来事でした。そしてその出来事に最初に触れたのは、これまた人に低く見られ、話題にも上らない羊飼いでした。イエスの誕生を計画された神は、出来事が小さく目立たない働きに宿るように計らったのです。

なぜ、このような計画を神は考えたのでしょうか。ここには、「誰が救い主の誕生を認める人だろうか」という問いの答えがあります。救い主の誕生を認めることができる人は、実は小さく目立たない人たちなのです。皮肉なことですが、クリスマスにしか教会に来ない人は「クリスマスの日に目立ってしまう人」です。そうではなく、「クリスマスの日にもあまり目立たない人」こそが、救い主に最初のごあいさつができる人なのです。ここに集まった私たちは、ほとんど目立たず、ネットで調べても見つけ出すことのできない人たちと言えましょう。まさに、救い主に最初にごあいさつをするのにふさわしい人々だと考えています。

私たちは今日、救い主を尋ね当てました。謙虚な心で待降節を過ごしてきたからです。小さく目立たない私たちだからこそ、神がご計画された最高の出来事に立ち会う喜びにあずかれています。救い主にごあいさつしようとしている私たちに今必要なのは知名度ではありません。むしろ、「何も誇るものがないという自覚」です。なぜなら、「救い主誕生のご計画は、ごく小さな目立たない働きに宿る」ものだからです。

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

主日の福音 2022/12/25(No.1214)



主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

御子の受肉はすべてを意味あるものとしてくださった

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」（1・14）先日、この箇所を黙想する機会を得ました。神様はなぜ、人となって、わたしたちの間に宿られたのでしょうか。全能の神様が、何か計画を果たすのに、人とならなければその無限の力を発揮できない場面があるのでしょうか。常識的に考えればそんな必要はどこにもありません。

しかし御父は、御自分の御子が人となってこの世界にお生まれになることを望まれました。神はあえて、生まれる体験と死ぬ体験をするために、人となられました。なぜでしょうか。それはひとえに、人間のためでした。すべての生きとし生けるものを救うため、すべての死にゆくものを救うため、マリアを通して人となってくださったのです。

神が人となってくださったので、私たち人間は神と関わりを持つものとなりました。神が人となって生まれてくださったので、生まれてきたすべての人が関わりを持ったのです。神は「全知全能永遠で限りなく尊く、また慈愛深いお方」です。もし神が人となってくださらなかったら、私たちの弱く不完全な特徴と、すべてに完全な神と、どこに共通点があったのでしょうか。

神が、か弱さを身に受けてくださったことで、すべての生まれてきた人が繋がりを持つことになりました。寒さにこごえている幼子イエスのおかげで、全世界で寒さにこごえている人が繋がりを持つことになりました。家畜小屋の飼い葉桶に寝かされていることで、家を追われ、肌を覆う物も満足に持たない人が繋がりを持つことになりました。

神がか弱さを身に受けてくださったことがどんなに意味深いことか、数え上げればきりがありません。生まれたことすらほとんど気づかれなかったおかげで、誰にも気にかけてもらえない人、生きる意味を見失っている人が繋がりを持つことになりました。

神の独り子が私たちと繋がっているのは誕生だけにとどまりません。与えられた朗読には「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった」（1・11）とあります。誠実に生きても受け入れてもらえない人が、この世界にいるかも知れない。神が人となられたことで、このような人とも繋がりを持つてくださったのです。

私たちはどうでしょうか。馬小屋に足を運び、考える必要があります。私たちが、人となってくださった神の独り子とは、どのような共通点・繋がりがあるのでしょうか。「私は今、豊かである。満腹している。笑っている。すべての人からほめられている。だから馬小屋のイエス・キリストと共通点がない。」もしそうであれば、それは最大の不幸と言うべきでしょう。

か弱い姿でお生まれになったイエス。この方を受け入れましょう。受け入れるなら、私たちが弱さや限界を感じる時、同じ姿を身に受けてくださったあなたを思い出すことができます。イエスのおかげで、私たちのどんな過酷な環境も、生きる価値がある場所となりました。ミサの終わりには、ぜひ馬小屋でしばらく祈り、感謝して帰ってください。またささやかですが、クリスマスプレゼントももらって行ってください。

神の母聖マリア(ルカ 2:16-21)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。